

小豆島霊場歩き遍路

(高松から日帰りでつなぐ一本の道)

目 次

はじめに.....	1
第1日目 平成18年4月16日(日).....	2
番外 総本院(そうほんいん)へ.....	2
64番 松風庵(まつかぜあん)へ.....	2
58番 西光寺(さいこうじ)へ.....	3
58番奥 誓願の塔(せいがんのとう)へ.....	3
59番 甘露庵(かんろあん)へ.....	3
60番 江洞窟(こうどうくつ)へ.....	4
61番 浄土庵(じょうどあん)へ.....	4
2番 大乘殿(だいじょうでん)、63番 蓮華庵(れんげあん)へ.....	4
57番 浄源坊(じょうげんぼう)へ.....	5
53番 本覚寺(ほんかくじ)へ.....	5
65番 光明庵(こうみょうあん)へ.....	6
66番 等空庵(とうくうあん)へ.....	6
68番 松林寺(しょうりんじ)へ.....	6
67番 瑞雲堂(ずいうんどう)へ.....	7
69番 瑠璃堂(るりどう)へ.....	7
70番 長勝寺(ちょうしょうじ)へ.....	7
帰路へ.....	8
第2日目 平成18年4月22日(土).....	8
長浜へ.....	8
71番 滝ノ宮堂(たきのみやどう)へ.....	9
72番奥 滝湖寺奥の院 笠ヶ滝(かさがたき)へ.....	9
72番 滝湖寺(りゅうこじ)へ.....	10
73番 救世堂(ぐぜどう)へ.....	10
75番 大聖寺(だいしょうじ)へ.....	10
76番奥 三暎庵(さんぎょうあん)へ.....	11
77番 歡喜寺(かんきじ)へ.....	11
76番 金剛寺(こんごうじ)へ.....	11
番外霊場 藤原寺(とうげんじ)へ.....	12
78番 雲故庵(うんこあん)へ.....	12
山の観音(やまのかんのん)へ.....	12
79番 薬師庵(やくしあん)へ.....	13
帰路へ.....	13
第3日目 平成18年5月14日(日).....	14
80番 子安観音寺(こやすかんのんじ)へ.....	14
81番 恵門ノ瀧(えもんのたき)へ.....	15

82 番 吉田庵(よしだあん)へ	16
83 番 福田庵(ふくだあん) 84 番 雲海寺(うんかいじ) 85 番 本地堂(ほんちどう)へ	16
86 番 當浜庵(あてはまあん)へ	17
帰路へ	18
第4日目 平成18年5月20日(土)	18
87 番 海庭庵(かいていあん)へ	19
88 番 楠霊庵(なんれいあん)へ	19
13 番 栄光寺(えいこうじ)へ	20
12 番 岡之坊(おかのぼう)へ	20
11 番 観音堂(かんのんどう)へ	21
9 番 庚申堂(こうしんどう)へ	21
8 番 常光寺(じょうこうじ)へ	21
7 番 向庵(むかいあん)へ	22
2 番 碁石山(ごいしざん)へ	22
1 番 洞雲山(どううんざん)へ	23
3 番 奥の院 隼山(はやぶささん)へ	23
3 番 観音寺(かんのんじ)へ	23
帰路へ	24
第5日目 平成18年6月4日(日)	24
4 番 古江庵(ふるえあん)へ	24
5 番 堀越庵(ほりこしあん)へ	25
6 番 田ノ浦庵(たのうらあん)へ	25
10 番 西照庵(にしてるあん)へ	26
15 番 大師堂(だいしどう)へ	26
16 番 極楽寺(ごくらくじ)へ	27
17 番 一ノ谷庵(いちのたにあん)へ	27
14 番 清滝寺(きよたきじ)へ	28
20 番 佛ヶ滝(ほとけがだき)へ	29
18 番 石門洞(せきもんどう)へ	29
19 番 木ノ下庵(きのしたあん)へ	30
21 番 清見寺(せいけんじ)へ	30
22 番 峯之山庵(みねのやまあん)へ	31
23 番 本堂(ほんどう)へ	31
帰路へ	31
第6日目 平成18年6月11日(日)	32
24 番 安養寺(あんようじ)へ	32
25 番 誓願寺庵(せいがんじあん)へ	33
27 番 櫻の庵(さくらのあん)へ	33

26 番	阿弥陀寺(あみだじ)へ	34
28 番	薬師堂(やくしどう)へ	34
29 番	風穴庵(かざあなあん)へ	35
30 番	正法寺(しょうほうじ)へ	35
31 番	誓願寺(せいがんじ)へ	36
34 番	保寿寺庵(ほじゅじあん)へ	36
32 番	愛染寺(あいぜんじ)へ	37
33 番	長勝寺(ちょうしょうじ)へ	37
	帰路へ	38
第7日目平成18年6月17日(土)		38
40 番	保安寺(ほうあんじ)へ	39
41 番	佛谷山(ぶつこくさん)へ	39
42 番	西の瀧(にしのだき)へ	40
35 番	林庵(はやしあん)へ	40
39 番	松風庵(まつかぜあん)へ	41
38 番	光明寺(こうみょうじ)へ	41
36 番	釈迦堂(しゃかどう)	37 番 明王寺(みょうおうじ)へ
43 番	浄土寺(じょうどじ)	
45 番	地藏寺堂(じぞうじどう)へ	42
44 番	湯舟山(ゆぶねさん)へ	43
47 番	梅尾山(とがのおさん)へ	43
48 番	毘沙門堂(びしゃもんどう)へ	43
46 番	多聞寺(たもんじ)へ	44
74 番	円満寺(えんまんじ)へ	44
49 番	東林庵(とうりんあん)へ	44
50 番	遊苦庵(ゆうくあん)へ	45
52 番	旧八幡宮(きゅうはちまんぐう)	54 番 宝生院(ほうしょういん)
51 番	宝幢堂(ほうどうぼう)へ	
55 番	観音堂(かんのうどう)へ	46
56 番	行者堂(ぎょうじゃどう)へ	46
	帰路へ	47
おわりに		48
小豆島霊場一覧		49

はじめに

バスと電車を乗り継いだ四国遍路を思い立ち、歩き始めたのが1年前であった。半年余りの期間のうち、延べ23日の行程で結願を迎えることができた。その結果、ある程度の減量の効果もあったが、その後はただただとした生活を送ったこともあり、以前と同じ様に肥満傾向の体を受け入れることになった。

再び陽春の頃を迎え、桜の花が咲くとともに、遍路の心がふつふつと湧いてきた。

今度は瀬戸内海に浮かぶ小豆島に偏在する寺院や堂庵を巡りたくなった。全行程およそ150Km。これまでと同様、休日を利用した区切り遍路なので、バスなどの公共交通機関を利用するが、歩いた跡を描くと、今度は1本の線に完全につながるような旅にしたいと考えた。小豆島観光協会や小豆島霊場協会からもらった資料によると、札所の数は、寺院30、堂庵64、計94箇所である。88箇所の札所に加えて、番外2、奥の院4を合わせて94箇所になる。納経は全ての札所で行うのではなく、代表寺院にて受け持ちの管理札所の堂庵を含めて行うシステムである。納経帳は寺号などが既に印刷されたものを使い、それぞれの寺院では、受け持ちの札所分をまとめて押印する。全ての札所に住職がいないこともあり、合理的ではあるが、お参りをしていなくても、代表寺院さえお参りすれば、管理区域の札所のご朱印を一度に頂けることに多少の違和感が残る。

ともあれ、季節は春。遍路旅には最適な時期である。54歳の誕生日を直前にして、遍路旅を始めることとした。

平成18年6月

松本 伊三男

第 1 日目 平成 18 年 4 月 16 日(日)

既に太陽が昇り、辺りは明るくなっている。7 時前に家を出て、自転車で高松港のフェリー乗り場へ向かう。途中コンビニで昼食分を合わせて食料を買い込んだ。7 時 20 分発の土庄行きの船内は多くの遍路姿の乗客がいた。40～50 人はいたであろうか。白装束に身を固めた人もいれば、ハイキング姿の人もいたが、互いに交わす言葉の内容から、お遍路さんであることが分かった。

1 時間の船旅である。船内でゆっくり朝食を済ませたが、それでも多少時間を持って余すことになり、自然とテーブルの向かいにいた老人と雑談を交わしながら、船が港に着くのを待った。

番外 総本院(そうほんいん)へ

定刻どおりに船は土庄港に着岸した。まずは納経帳を購入する必要があることから番外霊場である総本院へ向かった。港から歩くこと約 10 分で着いたが、意外やお遍路さんは誰もいなかった。船内で一緒にいたあの人達は一体どこへ行ったのだろうか。船から降りる時、港で待つマイクロバスに乗る姿を見かけたが、既にこの総本院は参拝済みなのだろう、通り過ぎたみたいだ。

四国霊場を参拝した時と同様、ロウソクと線香に火を点け、般若心経を唱えた。これまでと違うのは、納め札を用意していなかったことと、本堂や大師堂の区別がないことであった。参拝後、隣の売店で納経帳を購入したが、その際、島での納経料は、寺院 150 円、堂庵 50 円との説明を受けた。



64 番 松風庵(まつかぜあん)へ

総本院を後にしてから 5 分くらいで、次の札所である 64 番松風庵に着いた。天神神社と同じ境内に札所はあった。境内の桜は少し散りかけていて、昨日の雨に濡れて落ちた花びらが石段に張り付いていた。札所は少しの高台に位置することから、そこからは古い町並みや、次の札所である西光寺の塔を望むことができた。庵とはいうもの



の、ご本尊は地藏菩薩が奉られており、ガラス戸のあるロウソク立ても整備されていた。

読経を終えて次の札所へ向かおうとすると、地元の人とすぐ分かる婦人と子供が境内に遊びに来ようとしていた。私を見かけると、挨拶をしてくれるとともに次の札所の方向を親切に教えてくれた。

58 番 西光寺（さいこうじ）へ

読経をする所が1札所1箇所であることから、札所での滞在時間が非常に短い。10分間くらいである。松風庵を後にしたのは9時を少し過ぎた頃であった。

バス通りをしばらく歩き、突き当りの交差点を左に折れてから信号の手前の露地を右に曲がる。すると正面に鮮やかな山門が見えてきた。58番札所の西光寺の門である。山門は二層建てであり、朱色が見事であった。



本堂に入ると、そこは納経所を兼ねていて、既に住職が座って待っている。ロウソクと線香に火を点け、読経をしたが、プロに聞かれているような気がして何となく恥ずかしい気がした。納経料は、先ほどの松風庵や他の6つの庵、その外当寺院分と併せて500円であった。

58 番奥 誓願の塔（せいがんのとう）へ

誓願の塔は、三重の塔であった。ここは58番奥の院とされている。先ほどの山門と同様、鮮やかな朱色の塔であり、その形から歴史を感じさせるものを感じた。恐らく町のシンボルのようなものであろう。ここも少し高台に位置することから、小豆島の南側の海を臨むことができた。



59 番 甘露庵（かんろあん）へ

次の札所への道は古い町並みの中を歩いた。途中の電柱には、一昨年（2017年）の8月に襲ってきた台風時の浸水面の表示がなされていた。ひどいところは路面から1m以上高いところに赤い線があり、異常な水位であったことが示されていた。当時は、高松市の浸水風景が大きく全国にも報道されていたが、小豆島でも甚大な被害があったことが分かった。ここに至る途中、小豆島に縁のある俳人尾崎放哉の記念館があったので、外から見学した。立派な石碑とともに、入口付近に古い手押しポンプが現役で活躍しているのを見かけ、珍しくまた懐かしく感じた。



その後は、夏は海水浴で賑わう海岸通りを歩いたが、風が少し強く帽子が飛ばされそうになった。

甘露庵は海岸から少し山手に入った所で、石段を登ったところにひっそりと建てられていた。庵の同じ棟は地区の集会場となっていて、数人の人が集まり、何やら会合を行っており、

私が読経をしている間、時折笑い声が漏れ聞こえてきた。ここの境内からの景色も美しく、桜の花びらが風に舞っていた。

60 番 江洞窟（こうどうくつ）へ

59 番を後にしたのは 10 時 20 分頃であった。小豆島の形を犬に見立てると、今歩いているのは、丁度口の部分に相当する。潮風に当たりながら 30 分近く歩くと、小さな漁港に辿り着いた。60 番札所は、漁港の端にある山の壁面の洞窟の中にあった。洞窟の中は暗く、中央に本尊が奉られていた。階段を少し降りたことから、洞窟の床は海水面よりも低いところに位置すると思われる。また、本尊の右手奥には井戸があり、資料によると、昔は、ここを通る船が立ち寄って飲料水を得たらしい。

洞窟から出ると、目の前に海が開けており、海辺の景色がすばらしく見えた。



61 番 浄土庵（じょうどあん）へ

次の札所への道は、ずっとアスファルト道路を 50 分近く歩いた。千軒（せんげ）の集落を通り、小瀬（こせ）の集落に入った。ここの海岸には、沖合の岩礁に旗竿を立てて、そこから 20～30 匹もの鯉のぼりを海上に泳がせていた。これだけの鯉が泳ぐとなかなか見応えがあった。



札所の入口には鐘楼があり、門を兼ねている様に見えた。正面の庵の隣にもお堂のようなものがあったが、お参りは庵のみとした。

2 番 大乘殿（だいじょうでん） 63 番 蓮華庵（れんげあん）へ

61 番の札所を終えたのはまだ正午前であった。再び海岸沿いの道路を歩き始めたら、農作業をしていた婦人(老婆?) から、「お遍路さん」と呼び止められ、ミカンのお接待を受けてしまった。前回の遍路旅と異なり、今回の私の服装は、普段着にリュックと帽子。手にはストック（トレッキングポール）を持った姿である。この様な格好であっても、お遍路さんで見破られ



てしまった。

しばらくして土庄港が左に見えたことから、小さな島を一周したことに気がついた。ホテルやフェリー乗り場を左手に見ながら目指す札所への標識に従い、小高いところを登ると、棟割長屋の様な建物が目の前に現れた。なんと、長屋建築の中央の玄関を挟んで、左側が 62 番大乘殿、右側が 63 番蓮華庵と、二つの札所が一箇所に並んでいた。一箇所二霊場である。四国 88 箇所と言えば、68 番神恵院と 69 番観音寺とが同じ境内にあったようなものである。



おかげで快調なペースで参拝が進む。時刻はまだ 13 時前である。今日の当初の予定では、ここ 62 番と 63 番の札所を済ますとフェリーに乗って家路に向かうつもりであったが、帰るには早すぎるので、予定を変更することにした。昼食はこの境内で食べて、その後は時間の許す限り歩いて回ることにした。

57 番 浄源坊（じょうげんぼう）へ

昼食後は早朝歩いた同じ道を歩くことになった。土庄港から総本院への道を再度歩き、土庄町の役場の前をすり抜け土淵海峡を渡った。なんでもここは世界で一番狭い海峡だそうだ。素人目には川か大きな堀にしか見えない。大きなショッピングセンターを右に見ながら札所を目指す。しばらく歩くと県道から少し外れたところに札所はあった。境内には大きなウバメガシの木があり県指定の天然記念物の表示がされていた。



53 番 本覚寺（ほんかくじ）へ

札所を巡る順番が順不同であり、順打ちやら逆打ちやら分からなくなった。この混乱を加速させるのが、管理区域の札所の制度である。実際は参拝していなくとも、帳面のうえでは納経済みとなったり、その逆の状態が起きたりするのである。先ほどお参りした 57 番の札所は、次の 53 番の寺院の管理区域であるが、54 番や 55 番は別の寺院の管理区域である。



本覚寺への道は、人が通れるだけの狭い道を通った。多分裏道になるのだろう。近所の人に教えてもらった道を歩いたが、迷ってしまった。しかし、県道に出ると直ぐに札所の位置は分か

った。

少し長い石段を登り本覚寺の境内に着いた。境内は静かで良く掃除ができていた。傾斜地を利用した境内で小ぢんまりとまとまった感じで、幾つかの建物がうまく配置されていたのが印象的である。

65 番 光明庵（こうみょうあん）へ

本覚寺で納経を済ませる際、住職に 65 番の札所の場所を聞くと、直ぐ上にあると教えてくれたが、気がつかず車道に出てしまい、近所の人に再び場所を聞く羽目になった。同じ場所に戻り、設置されている周囲の見取り図を見ると、なんと本覚寺から出てきた出入口のその隣が 65 番の札所であった。札所の建物が出入口と一体化していたので分からなかった。てっきり別棟の庵を想像していたのが原因で、気づくのが遅れてしまった。

庵の中の奥に入ることができたが、そこは薄暗く、多くの寄進された小さな仏像が安置されていた。四国 88 箇所の札所にも同じような空間があったことを思い出した。



66 番 等空庵（とうくうあん）へ

65 番を後にしたのは 14 時を少し過ぎていた。県道に戻り、更に進路を北に取った。伊喜末（いぎすえ）地区にある札所のうち、一番手前の 66 番等空庵を目指した。歩いていると気がついたが、どうやらこの辺りはバスのフリー乗降区間のようだ。標準乗車停留所なる表示板があった。されば、手を上げると、どこでも乗車できるはず。そうならば、バス停まで行かなくとも、途中から通りかかったバスに乗って帰ればよい。そう考えると随分行程に余裕が生まれるような気がした。

札所は県道から外れた集落道に面しており、家並みの中に隠れるように建てられていた。



68 番 松林寺（しょうりんじ）へ

次の札所は、納経所となっている寺院を目指した。札所の順番でいくと、67 番の瑞雲堂なのだが、地図を見ると 68 番の松林寺のほうが近かったのである。人しか通れない道を歩くこと 10 分足らず。少し迷いながらも 68 番松林寺に着いた。20 段くらいの石段を登り境内に入ると、珍



しいことに、今日初めて同じお遍路さんと札所で遭遇した。3人連れの年配の女性グループであった。彼女達は、経本も見ずに読経をしていたが、私も彼女達に負けられないように、般若心経を唱えることにした。

ここの住職は非常に愛想が良かったし、親切であった。私が歩き遍路であることを伝えたと、これからの札所の位置や所要時間、経路やバス停の位置などを教えてくれた。

67 番 瑞雲堂（ずいうんどう）へ

松林寺の住職に 67 番札所への道を教えてもらったが、道を間違えてしまった。遍路道の案内表示に従って歩くと県道に出てしまった。付近の人に、札所である瑞雲堂



のことを聞いたが、たまたま知らない人に聞いてしまい、余計混乱した。別の通りかかった人に尋ねると、この人は、わざわざ乗っていた自転車を置いて、私を札所が見えるところまで歩いて案内してくれた。お堂は日当たりのよい山の斜面に建てられていて、私が見間違えた遍路道の案内表示から直ぐのところであった。どうも帰り道の案内表示であったみたいだ。

69 番 瑠璃堂（るりどう）へ

69 番札所の瑠璃堂の管理札所はその次の 70 番長勝寺であることから、今日の行程はなんとしても 70 番まで終わらせたい。そんな気持ちが湧いてきて、歩くスピードを少し上げた。意外や 69 番札所は近かった。10 分くらいで着いてしまった。私が堂に着くと、地域の方が堂庵の扉を開けてくれた上に、私の読経が終わるとお接待としてミカンまでくれた。



70 番 長勝寺（ちょうしょうじ）へ

瑠璃堂ではミカンの外に、お茶やお菓子まで誘われそうになったが、先を急ぐので断り、次の札所である長勝寺へ足を向けた。峠越えの道だった。県道を通ると遠回りになるので、近道を通った。車道に出るまで細い道であったが、遍路道を示す赤い札が吊り下げられているのを見つけると、この札が何か心強いものを感じた。



峠を越えて下り坂になり、集落が見え始める

と、札所の位置は遠くからでも直ぐに分かった。お寺の屋根は民家とは明らかに異なることから間違いない。

鐘楼門があり鐘を鳴らす。その後本堂に進み出てロウソク、線香に火を点け読経を唱える。ここまではスムーズにいったが、納経所に住職が出てこない。良くみるとインターホーンがあり呼び出すシステムのようなようだった。

帰路へ

少し待たされたが、住職は慣れた手つきで納経帳に押印をしてくれた。時刻は 16 時 25 分になっていた。朝、土庄港のバスターミナルでバスの時刻表を手に入れていたが、それによると、70 番長勝寺の近くのバス停である長浜(ながはま)から 16 時 37 分のバスがあり、それを逃すと次は 1 時間後となっていた。バス停まで 5 分とかからない距離なので楽々間に合ったが、なんと、ここで意外な人が待っていてくれた。松林寺の住職である。港まで車で送っていくとの申し出である。バスがもう直ぐ来ることから断ろうとしたが、土庄まで行くついでがあるから乗っていけとのこと。なんと親切な人なのだろう。ここはありがたく申し出を受けることにして、今回はここまでバスで来て歩き始めればよいと考えた。

港には 17 時前に着いた。17 時 30 分発の船に乗ると、遍路姿の団体が大勢乗っていた。不思議なものだ。この人達とは全然遍路の途中に会わなかったのに。

船は定刻に高松港に着き、我が家には 19 時過ぎに着いた。天候に恵まれ、気持ちのよい一日だった。

(歩数：42,298 歩、船賃：570 円×2=1,140 円、納経帳：1,000 円、納経料：150 円×5 寺+50 円×12 庵=1,350 円、残り札所数：94 - 17 = 77 箇所)

第 2 日目 平成 18 年 4 月 22 日(土)

天気予報によると午後から雨であった。しかし、朝窓から見る空は明るく、時折、陽射しも見える日和であったので、小豆島遍路の続きを実行した。

長浜へ

7 時 20 分発のフェリーに乗り、土庄港にほぼ定刻に着いた。6 分の待ち合わせ時間だが、楽々四海線目島行きのバスに乗り継ぐことができた。歩いた足跡をつなぐと完全な線になるような遍路旅を今回は目指しているのので、前回、松林寺の住職から送迎を受けた元の場所まで戻る必要があった。そのため、長浜のバス停までバスを利用することにした。

降りたバス停の位置からでも良かったが、長勝寺を再度お参りしてから 71 番札所の滝ノ宮堂を目指して歩き始めた。

71 番 滝ノ宮堂（たきのみやどう）へ

案内標識に従って緩い坂を登ることになった。長浜の集落を見下ろせる小高いところに差し掛かると、既に田植を済ませた小さな水田を見つけた。随分早い作付けに驚いた。9時を少し過ぎた時刻であるが、土曜日の朝であることから、辺りは非常に静かであった。カラスの鳴き声に混じって、ウグイスの鳴き声がさわやかに感じた。

札所へつながる道の交差点に、八坂神社があり、そこには「官牛放牧之跡」(海部俊樹)と刻まれた大きな石碑が建立されていた。神社の一角には牛をご神体として奉ってあったことから、昔はこの辺りは牛がたくさん放牧されていたことだろうし、重要な農業の労働力として扱われていたのだろう。

滝宮ノ堂は八坂神社から5分くらいのところにあった。集落道に面して鐘楼があり、境内に入る前に鐘を鳴らした。すると驚いたことに、堂庵のガラス戸が開く音がして、ご本尊が見えるようになった。堂庵には二人のお婆さんがいて、扉を開けてくれただけでなく、その後の私の読経の手助けをしてくれた。ロウソクと線香に火を点けて経を読み始めると、要所で鐘を鳴らし、相槌を打ってくれたのである。なんとなく気恥ずかしかった。



72 番奥 滝湖寺奥の院 笠ヶ滝（かさがたき）へ

72 番奥の院への道は人がやっと通れるくらいの山道であり、自然の中を歩く実感を得た。この辺りの地区の人が整備したのだろう木製の階段や簡易な手摺がところどころで整備されていた。見晴らしの良いところからは、海が見えた。曇天であることから、太陽の位置が分からず方位がハッキリしなかったが、地形から恐らく池田湾だろう。山道の路面は次第にゴツゴツした岩場になり、山の頂上付近で「笠ヶ滝清め



の不動堂」と書かれているところに辿り着いた。てっきりここが奥の院の場所と思い、丁寧に参拝をしたが、急な岩場を下ってから間違いであることに気がついた。

岩場の斜面を降りたところに奥の院の鐘楼があったが、札所の笠ヶ滝はそこからさらに鉄の手摺や鎖に身を任せながら登る岩場の上に建てられていた。良く見ると、手摺に人の名前が彫り込まれていた。信者が寄進したものだろう。暗いトンネルを通り抜けたところが奥の院笠ヶ滝の札所であった。ロウソクに火を点けようとしたら、住職から持ち込みロウソクは禁止ですとたしなめられてしまった。

72 番 滝湖寺（りゅうこじ）へ

笠ヶ滝は興味深いところであった。全体が岩の中の印象であり、暗いトンネルの中に「なで仏」があったり、梯子で登った所の洞窟の中にも仏像があったりで、結構参拝に時間を要した。ここを後にしたのは10時半を過ぎていたが、滝湖寺の本堂は直ぐ近くにあった。奥の院から10分とかからなかった。参拝を済ませ、納経帳にご朱印を貰おうとすると、「御用の方は木槌で入口の鐘を二度鳴らしてください」との貼り紙があった。売店もあるのに不用心だと思ったが、大らかなのが島の良いところだろう。本堂の下には戒壇巡りになっていて納経の後、見物することもできた。



73 番 救世堂（ぐぜどう）へ

滝湖寺からは随分近かった。道案内の標識に従い、左へ曲がり歩くこと10分足らず。地区の老人憩いの家と並んで札所があった。ここではどなたか先客がいたようだ。ろうソク2本に火が点ったままなので、ほんの数分前にお遍路さんが通り過ぎたと思われる。



75 番 大聖寺（だいしょうじ）へ

救世堂を後にする時に気がついたが、ここのご本尊は町指定の文化財のようだ。出入口の階段の横に、私の背丈ほどの石柱があり、その石柱に文化財と刻まれていた。札所の順番通りに参拝するのであれば、次は74番円満寺となるのであろうが、経路を考えると、一つ飛ばして75番大聖寺へ向かうのが通常のものである。ガイドブックにもそのような案内があった。途中県道を歩いていると、左手に白い巨大な仏像が目に入ってきた。小豆島・大本山・佛歯寺の大観音である。島88箇所の霊場には数えられていないのでそのまま素通りした。

目指す札所は、東馬越のバス停から左に曲がったところにあった。門を過ぎると左に鐘楼があったので、軽く叩いてから境内に入った。本堂は突き当たりの右にあり、中に入ると住職が納経所のところに座っていた。私の読経が終わり納経料を納めようとしたら、お接待としてヤクルトを出してくれた。歩き遍路の人にお接待として振舞っているようだ。お礼を言ったのはいうまでもない。納経を終えて次の札



所へ向かおうとした時、寺の門の角でミカンの無人販売があったので、一袋購入することにした。

76 番奥 三暁庵（さんぎょうあん）へ

ミカンを食べながら次の札所へ向かった。県道に戻りしばらく歩くと案内標識があったので、それに従った。77 番歡喜寺への標識もあったが、遠回りのように感じたので、三暁庵へ向かった。10 分くらいで着いたと思う。随分近かった。庵の入口に、笠松大師と彫りこまれた仏像があった。通りを挟んだベンチに背中のリュックを置いてから参拝し、その後ベンチに戻ると、なんとお茶とミカンなどが用意されていた。お接待である。ミカンは先ほど購入したばかりであり、リュックの中に幾つか残っているが、お接待は断ってはいけない。地区の婦人達が 3 人はいたようで、入れ替わりで甘酒まで持ってきてくれた。ろくに賽銭をはずんだわけではなく、申し訳ない気がしたが、笑いながら話しかけられた。彼女達も若い頃は遍路旅をしたそうで、その時の苦労話などを聞いて、互いに今の健康を喜んだ。



77 番 歡喜寺（かんきじ）へ

思わぬお接待を受けたが、先を急ぐことを理由に三暁庵を後にした。

次の札所へ向かう途中、ミニゴルフ場があった。リゾートホテルが近いので、たぶんその施設だろう。また、海越しに岡山県の山並みなどが望め、風景を楽しむことができた。空模様はやや怪しくなったが、まだ大丈夫だろう。アスファルトの車道に沿って歩くこと 15 分程度で 77 番札所の歡喜寺に着いた。札所と札所の間が非常に短いので、なにか物足りない感じがする。納経所には誰もおらず、インターホーンで家族の方を呼んでご朱印をいただいた。



76 番 金剛寺（こんごうじ）へ

次の札所の金剛寺へも 10 分程度で着いた。短時間の間に多くの札所を参拝することから、参拝した寺や堂庵の印象がぼやけてくる。撮った写真を見ても、なかなか思い出せない。そんな中、この札所では、納経所に住職がいなかつ



たのでインターホーンで納経をお願いすることになったが、「ノウキョウ」ですと言うと、「農協」と勘違いされたことを覚えている。「誰もいないので、後にしてくれないか」などの返事が返ってきて、つい機嫌が悪くなってしまった。家族の方は間違っただけだと詫言ってくれたが、インターホーン越しに話しをするときは言葉に注意をしなければいけないと反省した。

番外霊場 藤原寺（とうげんじ）へ

金剛寺を打ち終えた時、時刻は13時を少し過ぎていた。そろそろどこで食事をしようかなどと考えながら歩くことになった。適当な場所が見つからず、遍路道に沿って歩くことになり、番外霊場の藤原寺に着いた。ここはセルフサービスでご朱印をもらうシステムであり、本堂の中に貼り紙があり、納経料は賽銭箱に入れるよう注意書きもあった。ご朱印が3つあってどれをどう使うのか少し迷ったが、既にいただいたご朱印の押し方を参考にその中の1つを選んで自分で押した。境内に誰もいないこともあり、ここで昼食を取ることにした。朝のコンビニで買ったオニギリやパンを食べたが、ついでにお接待でもらったミカンもデザートとして味わった。



78番 雲故庵（うんこあん）へ

食事をしてから藤原寺を後にしたのは14時になろうとしていた。次の札所は78番雲故庵である。少々読み方の音に難があるような気がするが、恐らく古い言い伝えがあるのだろう。小海（おみ）のバス停から右に折れる。大体の場所しか分からないので、探しながら歩いた。途中札所と間違えた大師堂と称する庵もあり、少し迷ったが、農作業をしている人に聞いてようやく辿り着いた。境内に入り読経をした後から鐘楼があることに気がついたが、参拝帰りに鐘を鳴らすのは作法に反するそうなので鳴らすのを止めた。



山の観音（やまのかんのん）へ

78番の札所を終え、県道に戻ると、大坂城残石記念公園の道の駅があった。ゆっくり中を見たかったが、先を急ぐことにした。この頃から空模様が悪くなって、空から雨粒が落ちてくるようになった。予想どおりである。上下ともカッパを着たのは言うまでもないが、納経帳を濡らさないように注意を払う必要があった。

今日の予定は、どこまでと決めていたわけではないが、帰りの足は土庄へ向かうバ

スに乗ることを決めていた。福田発のバスの時刻表を見ながら、どこまでいけるかを考えながら歩いた。できればこの後、79番、80番、81番と打ち終えたいとも考えたが、81番への道が難所のように聞いていたことと、県道から約1時間を要する山登りの位置にあることから、往復の時間を考えると80番止まりを予想した。そう考えると、80番の札所付近を通るバスの時間帯を考慮すると、かなりの時間的なゆとりを感じた。

そう思いながら県道を歩いていると不思議な標識が目に入ってきた。「80番奥の院山の観音」と記された看板であった。小豆島遍路を計画したときの資料の中には、80番奥の院なるものはなかったし、納経帳にも該当ページがなかったからである。変だなとも思ったが、付近を通る帰りのバスの時刻まで相当時間がある。島88箇所の指定された霊場ではないかもしれないが、島では有名な寺院のようだ。県道から3Kmの山道ではあるが、往復しても次の札所の79番までは少なくとも行けると計算し、県道からそれた道を選んだ。

「山の観音」の山門には16時前に着くことができた。途中、山田ダムがあり、その辺にはダムの湖底に沈んだ田井地区への愛郷之碑が建てられていたのが記憶に残った。山門は朱色で鮮やかに塗られ、境内の庭もよく手入れがされていた。本堂の中は広く厳かな雰囲気か漂っていた。拝観料は不要であった。



79番 薬師庵(やくしあん)へ

登ってきた同じ道を帰り、バスの通っている県道に戻った。79番の札所は堂庵であり、納経所の寺院ではないことから、いつでも参拝は可能であった。札所に着いたのは17時を少し過ぎていたが、最寄りの停留所でのバスの発車時刻は17時26分であることから、余裕で参拝を済ませることができた。ついでにトイレも借りた。できれば80番の札所まで行こうと思っていたが、雨の中での山登りは意外と時間を要したことから、今日はここで打ち止めとこの時決めた。



帰路へ

バスはほぼ定刻に来て発車した。車内の乗客は、私を含めて6人。一見して旅行者と分かる者ばかりで、全員が土庄港まで乗車した。

港には18時前に着いた。18時40分発のフェリーの乗客は少なかった。先ほどバスで一緒だった人は高速艇に乗ったようだ。私は特に急ぐわけでもないの、フェリ

一で十分であった。

船が高松港に着いた時、雨は既に上がっていた。

(歩数：40,602 歩、船賃：570 円×2=1,140 円、バス：480+680=1,160 円、納経料：150 円×5 寺 + 50 円×5 庵 = 1,000 円、残り札所数：77 - 11 = 66 箇所)

巡拝した札所の数(11)と納経料の積算札所数(5+5=10)との数が合わないのは、管理札所の制度によるもので、参拝はしたが、納経料を納めていない札所があることによる。

第3日目 平成18年5月14日(日)

歩き遍路にとって、4月、5月は1年で一番良い季節である。しかも休日が多い。なんとか前回の遍路の続きを実行しようとしたが、今年のゴールデンウィークは、検査のために入院をせざるを得なかったり、休日の天気が悪かったりで、思うようにならず、遍路の計画が延び延びになってしまった。現に、昨日の土曜日に実行する計画であったが、朝から雨がかなり降っていたので、やむを得ず今日になってしまった。

島内バスの時刻表を検討した結果、高松港の始発便を利用しないと目的地までの接続が悪くなり、到着が遅れるので、6時25分発のフェリーに乗った。後発の高速艇でも良かったが、無駄な金を使うこともない。ほんの少し早起きすれば済むことである。

土庄港発8時15分のバスに乗り、前回の打ち止め箇所である田井のバス停に降り立ったのは8時45分になっていた。再度バス停近くの薬師庵をお参りしてから歩き始めた。

80番 子安観音寺(こやすかんのんじ)へ

薬師庵から20分程度で子安観音寺の山門に着いた。今日は何か行事があるのだろうか、山門前にはテントが設営されていて、何やら受け付けの準備をしていた。傍らにいた人に聞いたところ、護摩供養の式典があるそうで、大勢の人がこの後訪れるようなことを言っていた。境内に入ると、正面が本堂で、山門をくぐった左側に鐘楼があった。

本堂に歩み出てロウソクに火を点けようとしたら、灯明台がない。住職にどこにあるか尋ねると、わざわざ本堂奥まで火を点けたロウソクを運んでくれた。親切なお坊さんだ。読経を終えて納経帳を住職に差し出すと、4札所の納経料として300円を言い渡された。島遍路の初日に総本院でもらった資料によると、ここ80番札



所の管理札所は、当札所のほかは 79 番と 81 番であり、納経料は 250 円 (150×1 寺 +50×2 庵=250 円) の筈であった。このことを指摘すると、81 番奥の院、即ち、「山の観音」の札所が漏れているとのことであった。納経帳についても、ご朱印を押印した増補ページが添えられて返ってきた。

納経所を出て次の札所へ向かおうとしたら、別棟に案内されてうどんと甘酒のお接待を受けることになった。今日の護摩供養の日の特別のお接待かと思ったら、平日頃のことだそうだ。何でも、戦後間もない頃、本堂の再建を願って普請したところ、完成する直前に火災で焼失したそうである。それにも関わらず、改めて信者からの寄付で再建を果たすことができたことから、そのお礼としてうどんのお接待を始めたそうである。

81 番 恵門ノ瀧 (えもんのたき) へ

80 番を終えると、海岸の砂浜を歩きたくなった。アスファルトの道路ばかりで少し飽きてきたのもそうだが、小部 (こべ) 地区の有名な海水浴場の横を歩くようになったので、波打ち際に出てみたくなったのである。この時期の海水の透明度はさすがであった。夏になれば大勢の海水浴客で賑やかになるのだらうと想像しながら歩いた。頃合の時に県道に出ると、丁度 81 番札所への登山口のところに出ることができ、そこからは山道を歩くようになった。

81 番札所への道は徒歩でのみ通行が可能な道を通った。地図を見ると車道もあるのだが、敢えてこちらのほうを選んだ。小鳥のさえずりや水の流れる音を聞きながら、しかも適度に吹いて来る風を浴びながらの歩行であった。岩がゴロゴロ露出したところもあり、歩きにくいところもあったが、自然の中を歩く一時を楽しんだ。残念なことは、札所前の車道に出る直前に見た多くの廃棄物であった。乗用車や冷蔵庫のようなものが道路際から谷に捨てられていたのである。嫌なものを見てしまった。

車道から続く石段を登ると、途中に中国風の鐘楼門があった。コンクリート製で下部が白色、上部が朱色に塗られていた。一礼し鐘を鳴らしてからさらに石段を登る。



厄除け階段で、下から幼坂 13 段、女坂 33 段、男坂 42 段、その後も階段は続いたが、鉄の鎖伝いに坂を登るようにもなっているところもあった。参拝後にこの坂を降りたほうが良いと思い、登りは遠慮して傍らの石段を利用して札所まで行くことにした。

朱色に塗られた柱で支えられた札所は岩の洞窟を巧み利用した構造になっていて、中に入ると天井の低いところもあり、暗さも手伝って気をつけないと頭に当たりそうになった。4~5 人の参拝客が熱心に読経をしていたが、それに混じって私も参拝した。

82 番 吉田庵（よしだあん）へ

鎖を伝って急坂を降りた。45 度以上の斜度があった。前日の雨に濡れて滑り易いところもあったが、予想に反してリュックを背負っていても簡単であり、見た目ほどではなかった。その後は来た時と同じ山道を下った。何時もそうだが、山歩き用にストック（トレッキングポール）を 2 本持ち歩いていることが随分役に立った。ストックを通じて両手が地面と接していることから、歩行の安定度が格段に違う。4 本足で歩いているようなものだ。下り道とはいえ、40 分足らずで県道に戻ることができた。

県道から次の札所への道は退屈に感じた。小豆島では珍しく札所間の距離が長いし、風景といっても殺風景な採石場が嫌でも目に入ってくる。削り取られた山肌は無残にも感じるが、島の大切な産業であることを考えると複雑な気持ちになる。12 時を過ぎているので、どこか適当なところで昼食を食べようと考えていると、灘山（なだやま）のバス停の前を通りかかった。バス停の小屋の中にはベンチもあり、日陰もあるのでここで休憩を兼ねて昼食を取ることにした。

バス停を後にしたのは 13 時丁度。目指す吉田庵へはそれから 1 時間かかった。採石場の風景が終わり、緑の山肌になると、ウグイスの鳴き声も聞こえるようになったが、暴走族のような排気音を出す何台かの車にも出くわした。穏やかな気分が吹っ飛んでしまう。

吉田の集落に入ると、大きなダム of 堰堤が目の前に現れた。札所はダムから流れる川沿いの道に面して建てられていたが、県道からの参拝路は昔と違っているのだろう。近くの案内標識の向きがおかしいので地元の人に尋ねると、昔は別の道を通っていたそうだ。そういえば、吉田庵の鐘楼は敷地の奥に位置していて、その先に集落道が続いていた。お遍路が札所に着くと、まず鐘楼を打ち鳴らす。その後本堂で参拝する手順を考えると、河川沿いの車道から見える現在の吉田庵の建物の配置は不自然な印象を受けた。



83 番 福田庵（ふくだあん）、84 番 雲海寺（うんかいじ）、85 番 本地堂（ほんちどう）へ

吉田庵から次の札所へも 1 時間近くかかった。途中なぜか右足のくるぶしのところが軽く痛み出し、歩く速度が落ちてきてきた。痛みの原因は分からないが、靴紐を緩め、負担のかからないような姿勢を保って歩くことにした。

福田の町に入り、少し迷いながらも 83 番札所に着いたのは 15 時を少し過ぎていた。福田



の集落には、3つの札所が集まっているので、一気に納経ができる。福田庵は県道から500~600m奥まったところにあった。神社や学校を見ながら通り過ぎたところに建てられていた。また福田庵から300mくらい離れたところに84番雲海寺と85番本地堂があり、随分短時間の間に参拝することができた。



雲海寺と本地堂は同じ境内にあった。同じ境内に二つの札所があることは、小豆島では珍しいことではないようだ。62番と63番、65番と53番の札所がそうであった。また、58番とその奥の院も同じ境内といってよいだろう。札所の番号が別番号ではないけれども、納経料が別であるし、境内から階段を上ったただけのところであったので同一境内とみなせると思う。

雲海寺は興味が深かった。本堂の賽銭箱が巾着の形をしていたのである。大きな木を刳り貫

いたのだろうか。表面に奉納と書かれているので、信者から奉納されたものだろう。さらにこれに加えて、参拝するところに大きな祈願念珠が吊り下げられていた。四国88箇所の霊場の内、76番金倉寺にあったものと同じである。手前に引くと、カタカタと音を立てる。見ていて、また聞いていて飽きない。



86番 当浜庵（あてはまあん）へ

今日の帰りの足は、福田港を17時過ぎに出る土庄行きバスに途中から乗ることを決めていた。本地堂の参拝が終わったのは15時40分。そこから次の86番札所までは約5Km。約1時間の距離である。その札所近くのバス停を17時13分発のバスがあることが分かったので、残りの時間と距離から86番の札所へ向かって歩くことにした。

県道沿いに歩くしかないのだが、この区間には歩道がない。時折暴走してくる車やバイクが気になった。道が曲がりくねっていることから、突然車が現れる感じで、少し危険を感じることもあった。集落の間の距離が結構あることや、この区間を歩く人が多くいるとも思えないことから、今後とも歩道の整備は難しいと思う。電動三輪車に乗ったお年寄りが道路を走っていたが、少し危ない印象を持った。そのほか、道路を改良して残った余幅地を利用して石の彫刻が飾られているところが何箇所もあったのが印象的であった。



丁度1時間で当浜（あてはま）の集落に着いた。目指す札所は、県道から100mくらい山手

に入ったところにあった。札所の名前は地名から取っているのだろうが、字が旧字である。

私が読経を終えて境内で休憩をしていると、わざわざ近所のオバチャンがヨモギ餅を持ってきてくれた。またお接待を受けることになった。声を出して読経をすることにより、お遍路が来たと気がついてもらえたのだろう。

帰路へ

最寄りのバス停は、札所から近くにあり、発車時刻に余裕をもって着いた。バスは定刻に来て発車した。車内で各バス停の到着時刻と、港からの出航時刻を突合わせると、土庄港までバスに乗り続けるより、途中の草壁港で下車し高速艇で高松に帰る方法と、池田港で下車してフェリーで帰る方法があり、しかも、土庄港経由より早く帰宅できることに気がついた。問題があるとすれば、草壁港での乗継は7分間しか余裕がないことであった。バスが遅れたり、乗船切符の購入に手間を取ったりするとOUTである。これに比べて、池田港や土庄港での乗り継ぎは時間に余裕があるが、高松港に着くのはそれだけ遅れることになるので、できたら草壁港から帰りたいなと考えた。

草壁港には17時38分の定刻に着いた。しかし、高松港行き的高速艇の乗り場は、私が思っていたところから50mくらい離れていた。つい、切符売場には寄らずに、直接船の乗り場へ走って行った。後から考えると走らなくとも十分時間があつたのだが、この船に乗り遅れると、後続のフェリーを待つかバスなどで他の港に行くしか方法がなかったので必死であった。

高速艇に無事乗ることができて、我家に着いたのは19時少し前。いつもどおりの夕食時間に間に合った。

(歩数：39,138歩、船賃：570+1,140=1,710円、バス：680+580=1,260円、納経料：150円×2寺+50円×6庵=600円、残り札所数：66-7=59箇所)

第4日目 平成18年5月20日(土)

朝目が覚めると前日からの雨は小降りになっていた。朝の天気予報では、午後から晴れ、明日は快晴との予想である。気温も高くなるようなことも言っていた。予定では、明日に遍路旅をするつもりであったが、間もなく雨も上がることだろうし、涼しいうちに歩くほうが良いと考えて、リュックを背にして高松港へ向かった。

高松港発8時2分のフェリーに乗り土庄港に着き、9時10分発の南回りの福田行きバスに乗り継いだ。それから約1時間の乗車で、当浜に着いた。この経路が一番早く当浜に着く手段だと思っていたが、バスの車内で時刻表を確認していて他にも方法があることに気がついた。土庄港で北周りの福田行きバスに乗り、更に福田で土庄行きのバスに乗り継ぐ方法である。遠回りのようだが約1時間は早く着くことができる。

そのためには、高松港をより早く出る必要があったがもう遅い。バス停近くの當浜庵を再度お参りしてから 87 番の札所へ向かった。この時、雨はすっかり上がり青空が見えてきた。

87 番 海庭庵（かいていあん）へ

歩き始めて直ぐに、県道の横に休憩展望所が整備されているところがあった。景色が良いので立ち寄ってみた。案内看板によると、正面が淡路島で、その左右に明石大橋と鳴門大橋が望めることになっていた。残念ながら、遠景は望めず、天候は回復したものの、橋の姿は確認できなかった。これが夜であれば、ライトに照らされて、海に浮かんで見えたであろう。

この休憩展望所の直ぐ横には、大阪城築城残石の公園があった。八人石苑路の表示板があり、延長 240m の小路が設けられていた。昔、この丁場で 8 人の石工が石の切り出し時の事故で死亡したとの言い伝えが残っているそうである。切り出した石を大阪まで運ぶのは船であったはずで、海岸までの落差を考えると大変な作業であったことが容易に想像できる。

寄り道をしながらでも 11 時前に 87 番の札所である海庭庵に着いた。境内は狭く、



門すらなかった。山が背後に迫ってきており地形的に、無理なのだろう。しかし、参拝後ベンチに座ってボンヤリしていると気がついたことがある。正面の岩ヶ谷（いわがたに）の海がまるで庭のように見えたのである。この堂庵の名前の由来かもしれない。今日は穏やかな海をしているが、荒れた日には、この堂庵の下まで潮の飛沫が舞うのだろうなどと想像した。

88 番 楠霊庵（なんれいあん）へ

海庭庵を打ち終え、次の札所へ向かう途中にまた景色の良いところを見つけた。南風台（なんふうだい）の地名があった。離れ小島と砂州でつながり陸地と化していたところに目をとまった。また辺りには蘇鉄の木があり、南国ムードが漂っていた。土曜の午前中であり、暴走する車もこの時間はなく、自然の中でゆったりとした時間の流れを感じることができた。

楠霊庵は南風台から 10 分くらいの距離であった。県道に面していたが、30 段くらいの石段を登った小高いところに位置していた。鐘楼を鳴らし、ロウソクと線香に火を点し、丁寧に読経を済ませた。

札所の番号から結願所になると思われるが、それにしても、失礼ながら風格が足りないよう



に感じた。まだ遍路の途中の参拝であり、参拝をしていない札所が多く残っていることも原因だろう。当然達成感など湧くはずがない。四国霊場 88 番大窪寺で味わった感動にはとても及ばず、比較にならなかった。

13 番 栄光寺（えいこうじ）へ

11 時半過ぎに 88 番札所を後にした。楠霊庵にあった案内板によると、次の札所は 12 番岡之坊となっていた。しかし、どこで案内標識を見落とししたのか次に訪れたのは 13 番札所の栄光寺であった。どこかで昼食できるようなところはないかなどと考えながら歩いたのが原因だろうが、ガイドブックによれば、88 番の後は 13 番であり、その次に 12 番を巡拝するような記述になっていたのも間違いでもなさそうだ。

門前に着いた時刻は 12 時 40 分。立派な庭があった。ここで昼食を食べることを決めてから参拝した。

大きな鐘楼門をくぐり本堂の前に行くと、なんと緑色の大きな海亀の像があり、その甲羅の上に賽銭箱が乗っていた。亀に関する言い伝えでもあるのだろうが珍しい形をしていた。



12 番 岡之坊（おかのぼう）へ

境内の片隅にベンチがあったのでそこで昼食を食べた。丁度日陰になっていた。天気予報が当たり、気温が上昇しているのを感じていたのも、日陰のベンチはありがたかった。昼食を食べながら今日の午後の日程を検討した。12 番岡之坊は当然参拝するとして、その後をどうするかが問題であったからである。南の坂手（さかて）港へ向かうコースを取るか、西北の寒霞溪（かんかけい）へ向かうコースか迷ったからである。丁度分岐点に位置しており、どちらのコースを取っても、どの札所で打ち止めになるか予想する必要があった。さらに帰りの足であるバス便や船の便も検討する必要があった。結果は坂手港コースに決めた。理由は、帰りのバス便の有無とその運行時刻であった。

選択するコースを決めると直ちに出発しなくなった。時間を無駄にできないと感じたからだ。栄光寺の門を出て直ぐに左折し、近所を歩く人に道を尋ねて 12 番札所の岡之坊に着いたのは 13 時 10 分過ぎであった。5 分とかならないほどの近くの距離であった。札所は日当たりの良い高台に位置しており、その境内からは先ほど歩いてきた県道を見下ろすことができた。



11番 観音堂（かんのんどう）へ

岡之坊を打ち終えた後は県道を横断し、川沿いの道を歩いた。坂手港に続く県道に出て直ぐに案内標識を見つけることができたが、11番の札所は少し入り組んだところに建てられていて分かりにくかった。それでも15分くらいで着くことができた。石段を登り境内に入ると、壁に多くの落書きが目についた。その書かれた内容は、願い事ばかりであり、神社の絵馬が壁に代わったようなものを感じた。ここは「いたち観音」とも言われているようだ。ボケ封じのほか足が丈夫になることのご利益があるそうだ。一週間前に歩いた際もそうであったが、今日も右足のくるぶしが痛みだしていたので、治るようお願いした。



9番 庚申堂（こうしんどう）へ

人間がやっと歩けるような道を通り抜けて次の札所である庚申堂を目指した。これまた分かりにくい道であった。県道に戻ってから目指せば案内標識もあったと思うが、地元の人に尋ねると近道があるとかで、それを信じて歩いた。迷いながらも辿り着いたところは、かなり古いお堂であった。「小豆島霊場九番庚申堂」と看板があったので間違いはない。本堂の屋根の修理のための寄付をお願いしたいとの貼り札が掲げられていて、良く見ると下屋の部分は波板のトタン葺きでありかなり錆びていた。みすばらしい雰囲気、少し哀れな感じがした。



8番 常光寺（じょうこうじ）へ

札所間の距離が非常に短く、10分も歩けば次の札所に着く。次に着いた札所は8番常光寺。ここでは初めて団体のお遍路さんと出会った。マイクロバスから白い遍路装束の人が並んで降りていた。大きな鐘楼門があり、お遍路さんの列に並んで順番を待って鐘を鳴らした。門を通る人の数だけ鐘が鳴るので、多少うるさく感じる人がいたかもしれない。



本堂の中に歩み出て静かに読経をしたかったが、住職がマイクを使って団体遍路の対応をしていたことが耳障りであった。静寂な中での参拝が私には向いているようだ。納経帳にご朱印を貰うのにも少し待たされた。

7番 向庵(むかいあん)へ

納経後、先ほど通ってきた鐘楼門を出て次の札所へ向かおうとしたが、方向が分からない。丁度駐車場のところに団体遍路のバスの運転手がいたので札所の位置を訪ねると、直ぐそこに見えている屋根がそうだと親切に教えてくれた。

30m 余りの坂を登ったところに 7 番札所があった。灯明台のロウソクの火は消えていたが、線香の煙が揺らいでいた。恐らく先ほどの団体の遍路の方々が参拝した跡なのだろう。敷地は非常に狭いが、新しく建て直した堂庵のようで、地区の集会場を兼ねているようにも見えた。参拝後は境内の日陰にあったソファに腰を落として今日の予定を再確認した。時刻は 14 時 40 分。これから山を登って 2 番、1 番、3 番奥の院の順番で札所を巡り、山を下って 3 番札所の参拝が可能かどうか。より遅い便のバスもあるが、できれば坂手東を 17 時過ぎに発するバスに乗りたい。それができないなら、10 番、4 番、5 番、6 番の順番で海岸に沿って行けるところまで歩き、田ノ浦映画村発のバスで家路に着こうと考えた。右足のくるぶしの痛みが強くなったのが気になった。地図を眺め、バスの時刻表を調べた結果、山登りの方を選択した。残り時間は十分にあると判断した。



2番 碁石山(ごいしざん)へ

向庵を後にしてアスファルトの坂道を登る。気温が高いことと、日陰が少ないことから、汗が吹き出るようになった。喉も渇く。案内標識によると札所まで 2.5Km の距離なので、少し我慢すれば辿り着ける。途中、近道なのだろうか山道へそれる道標を見つけた。山道を登るようになると、勾配は多少きつくなかったが、木々に覆われたところを通るようになったので、涼しささえ感じる事ができた。遍路道であることを示す小さな赤い文字の札が幾つか吊り下げられたところもあったり、洞窟のような大きな岩場では墓石のようなものまであったりした。

短い山道が終わると、2 番札所の門前に着いた。本堂はそこから石段を登った突き当たりであった。途中、景色のすばらしいところがあった。右に内海湾、左に坂手湾、



その間に田ノ浦の分教場に続く岬が続いていて、海が輝いて見えた。目を右に移すと、内海の町の中心部を見下ろすこともできた。

本堂の入口には「碁石山鳳凰窟」の文字が見えた。なるほど中は洞窟になっていて薄暗かった。ロウソクに火を点けようとしたら、住職に断られたのが残念である。

1 番 洞雲山（どううんざん）へ

洞窟を出ると、外の光が眩しかった。もう一度景色を楽しみながら、来た道を引き返す。次の札所である洞雲山はあっけないほど近かった。5分とかからなかったのではないだろうか。



鐘楼を鳴らしてから境内に入ると、正面に大師堂があった。意外と広い境内である。大師堂の右の階段を登り、さらにその奥へ行くと、洞窟があり、中に祭壇があった。恐らくこの洞窟の方が本尊だろうが、大師堂とともに、それぞれ読経をして参拝をした。後で調べると、この洞窟は仙霊窟というそうで、毎年、夏至の日を中心に約50日の間、午後3時頃に3メートルもの観音様の影が現れるそうである。5分間しか現れないとのことで、もっと調べて時期を選んで参拝に来ればよかった。

3 番奥の院 隼山（はやぶささん）へ

洞窟から次の札所である3番奥の院も随分近くにあった。16時丁度に札所の門前に着いたが、ここの山門は珍しく左右二体の仁王像が門を守っていた。山門と言うより仁王門である。細長い境内の奥に本堂があり、中は広い畳の床となっていた。通夜堂を兼ねているのかなとも思った。20~30人は楽に泊まれる広さであった。



3 番 観音寺（かんのんじ）へ

3番奥の院の参拝を終えると、後は山を下るのみであった。次の札所までは2Km余り。帰りの足であるバスの乗り場までは札所から10分の距離と考えていた。バスの発車時刻までまだ1時間あることを考えると、余裕のある歩きになった。眼下に坂手港が見える。3番観音寺は坂手港の直ぐ近くである。

観音寺へは道にも迷わず30分足らずで着いた。きれいな庭がありよく手入れがされていた。今日の遍路の最後であり、丁寧に参拝を済ませたが、残念なことが待っていた。納経帳にご朱印をいただこうと思い、住職をインターホンで呼んだ。長くベルを鳴らしても、家の奥で何の反応もない。5分くらい待っても返事がないので、玄関に回ってみると、そこには郵便局の配達員がこれまた困ったように立っていた。どうも住職は不在のようだ。配達員は不在票を書き残して立ち去ったが、私は納経帳にご朱印を貰わないと、再度ここに来な



ければならないことになる。結局、バスの発車時刻ぎりぎりまで玄関で待ったが、住職は現れることはなかった。何か事情があるのだろうかと思うが、随分迷惑な出来事であった。

帰路へ

坂手東バス停発 17 時 10 分のバスに乗った。途中の草壁港で降りて前回と同じ便の高速艇に乗り継いで帰っても良かったが、今回は池田港で乗り継いで家路に着いた。いろいろな交通手段を試してみたかった。池田港発 18 時のフェリーに乗り、高松港に着くと、何やらテンポの良い音楽が流れていた。土曜日の夜のサンポートでのストリートライブである。生バンドにしばし耳を傾けたが、こんなところで、こんなことをしているとは今まで知らなかった。若い人が多く集まっていた。

遍路による適度な疲れは、心休まる音楽に癒されたが、残念なことに気がついた。今まで必ず長く歩くときには身に着けていた万歩計を、今日は忘れていたのである。したがって、今日の歩数は推計である。20Km を平均 50cm の歩幅で歩いたとして、4 万歩を今日の歩数としたい。

(歩数：推定 40,000 歩、船賃：570+570=1,140 円、バス：1,080+600=1,680 円、納経料：150 円×2 寺 + 50 円×10 庵 = 800 円、残り札所数：59-12 = 47 箇所)

第 5 日目平成 18 年 6 月 4 日(日)

前回の遍路の際に、右足のくるぶし付近が腫れて痛みを感じたこともあり、しばらく歩くのを控えて足首の様子を見ていたが、10 日余りの間、湿布を貼り続けた甲斐があって腫れが少し引いたし、痛みも和らいだ。朝目を覚ますと、天候も良さそうなので、家族に書置きを残して家を出た。

今日の遍路コースは、先ず坂手港近くの観音寺を再度参拝した後、二十四の瞳で有名な田ノ浦まで往復し、北上して寒霞溪の中腹にある霊場を巡り、草壁港に至るおよそ 30Km の行程である。机上でシミュレーションをした結果、帰りの足としてバスの便がないことが分かり、帰りの港まで全て歩く必要があった。そのため、可能な限り、島での歩く時間を確保するため、朝一番の船に乗り込んだ。

土庄港で 10 分の待ち合わせで坂手港行きのバスに乗り換えた。終点の坂手東のバス停で降りた時刻は 8 時 15 分であった。高松港からこれが一番早く着く方法である。

すぐさま、3 番観音寺を再度お参りし、納経帳にご朱印いただいた。

4 番 古江庵(ふるえあん)へ

少し前まで京阪神への港町であった坂手港は何となく寂れて見えた。昔、子供の頃父に連れられて船で神戸や大阪へ行くときは必ず寄港した港である。賑やかだった頃

を知っているだけによけいそう思う。この時は港に一隻の船もいなかった。しかし、次の札所へ行く途中、沖合に停泊している帆船を見つけることができた。船の名前は確認できなかったが、先月末アスパック高松(第56回 JCI アジア太平洋地域会議高松大会)のイベントでサンポート高松に寄港していた「海王丸」だと思う。セールはたたんでいたが、優雅な様はさすがであった。

次の札所である古江庵は、岬へ向かう県道の三叉路から僅かの距離のところにあった。砂浜の横にひっそりと建てられていたが、私が参拝する前に、誰かが訪れた跡に気がついた。線香から煙が立ち昇っていたのである。一方、砂浜にはこれからボート遊びをするのか、若者達がトレーラーからモーターボートを海に降ろしていた。今日は暑くなりそうなので、なんとなくうらやましく感じた。

県道の案内標識によると、この辺りに特殊潜航艇の基地跡があるそうだが、どこがその跡なのかよく分からなかった。



5 番 堀越庵(ほりこしあん)へ

古江庵を後にして次に向かったのは、5番堀越庵である。半島のくびれたところから南側の海岸に出てから路地裏の奥まったところにあった。車は通れない。民家の間の裏道のようなところを歩いて札所に着いた。とても団体の遍路が訪れるようには思えない雰囲気であるが、道案内の道標は整備されていたので、迷うことはなかった。

読経を終えて次の札所へ向かおうとしたら、近所の婦人から「ようお参りなされた。」などと声をかけられ、遍路話をしばしすることになった。歩いて巡拝をしていることなどを話すうちに、ストック(トレッキングポール)を手にするのを忘れていたのに気がついた。いずれ気がつくものであるが、歩き始めた後に、後戻りして忘れ物を取りに帰るのは辛い。そう考えると、この時この婦人が声をかけてくれたのは、お大師様のお導きかもしれない。



6 番 田ノ浦庵(たのうらあん)へ

次の札所への道は、テッキリ海岸沿いを通るものと思っていたのだが、案内標識に従って歩いた道は、峠越えの山道であった。そんなに高くない山なのだが、気温が高かったたこともあり、汗を一杯かくことになった。道幅は1mくらいで狭く、さらに石段や木階段の踏み幅はも



っと狭いところもあった。通る人が少ないのか、蜘蛛の巣が多く、かき分けることが多かった。峠には大師像が安置されていた。その後の下り道は、竹やぶの中を縫うような山道で、滑り易いところもあり、この時も両手に持つストック(トレッキングポール)がありがたく感じた。道のあちらこちらには、黒い穂先の竹の子が生えていて、歩きにくかったが、時折聞こえてくるウグイスなどの山鳥の鳴き声がさわやかに感じることができた。

田ノ浦庵は、狭いながらも神社と同じ境内にあった。読経をしていて気がついたことがある。札所でご本尊の真言を唱えるのだが、この田ノ浦庵のご本尊は「無量寿如来」で真言は、「オン アミリタテイセイ カラ ウン」である。同じ真言を先ほども唱えた記憶がある。5番札所のご本尊は「阿弥陀如来」で真言は、「オン アミリタテイセイ カラ ウン」。4番札所のご本尊も「阿弥陀如来」。真言は当然同じである。連続した3つの札所の真言が同じであるのは非常に珍しいと感じた。

10番 西照庵(にしてるあん)へ

田ノ浦庵を打ち終えて県道に出ると、そこは有名な岬の分教場であった。その運動場は県外ナンバーの車の駐車場となっていた。また、観光客とすぐ分かる団体が付近を散歩しているのを見かけることができた。近くには二十四の瞳映画村もあり、時間に余裕があれば立ち寄りところであるが、今日の遍路の計画から考えて、とてもそのゆとりはなかった。

大石先生が自転車で通ったとされる県道を歩くこと約1時間足らずで西照庵に辿り着いた。一本道なので、途中、車に対向したと思ったら、同じ車に後から追い抜かれることが多かった。大型の観光バスやツーリングのバイクが、岬を訪れてから引き返してくるのである。歩く人はほとんど居ないので、先方からは私を見て変わった人が歩いていると思ったに違いない。

西照庵は県道に面して建てられていた。境内の灯明台には、火が点いている口ウソクが数本あり、線香の煙も立ち昇っていた。ほんの数分前にお遍路さんが参拝したのが分かった。

境内には大きな屋根のある休憩所があり、ベンチが設けられていた。12時前であったが、この次の札所まで少し距離もあることから、ここで昼食をとることにした。



15番 大師堂(だいしどう)へ

コンビニで買ったオムスビを食べてから、長く休憩することなく次の札所へ向かった。心配していた右足のくるぶしも痛みはあるものの大きく腫れることはなかったの

で、少し早足で歩くことにした。長い山登りの箇所がこの後に控えているので、平地で楽に歩けるところはペースアップを試みた。13 時前に大師堂に着いたが、ここへの道は分かりにくかった。地図で大体の位置は分かるのだが、案内標識を見逃したのか少し迷ってしまった。近所の人に道を尋ねようと、玄関先で声をかけたが不在の家が多かった。結局自転車で遊ぶ子供を呼び止め、その子の家まで押しかけてお母さんに教えてもらうことになった。

鐘楼を鳴らし大師堂で手を合わし読経を済ませたが、鐘楼門を挟むような位置に別棟の建物があった。大師堂より立派に見えたが、資料によると、阿弥陀堂となっている。ここの堂庵は合掌だけにして先を急いだ。



16 番 極楽寺(ごくらくじ)へ

少しでも近道をしようと、地図を見て、15 番の札所から次の 16 番へ線を引くと、小高い山が邪魔をした。仕方なく、極楽寺への道は少し迂回しながら歩くことになった。近道はないようであった。

20 分ほど歩くと、極楽寺への参道の入口に着いた。堂庵と違って、寺院ともなると、小さな寺でも風格を感じる。参道を真っ直ぐ進むと、池に架かった石橋があり、



それを渡って山門をくぐる。境内に入ると左に鐘楼、ほぼ正面が本堂となっていた。境内はよく手入れがされており、気持ち良かった。住職が常駐していない堂庵と比較するのが間違っているのだろうか。納経帳にご朱印をいただいた後、次の札所へ向かおうと山門を見ると、祈願念珠が奉納されていたのに気がついた。つい手にとって手前に引っ張ると、カタカタと音がした。

17 番 一ノ谷庵(いちのたにあん)へ

極楽寺の駐車場のところに遍路道の案内表示があり、これに従うと 16 番から 17 番への道は狭い山道となっていた。昔からの道と言うより、何かの工事で付け替えた感じである。傾斜地の防護コンクリートの天端沿いを歩いたからだ。そこには歩行者転落防止のための新しいフェンスが設けられていた。17 番の札所は突然目の前



に現れた感じである。おそらく札所の裏側の道から参拝したのだろう。

竹炭の無人の販売所の横に 17 番の札所の入口があり、中に入ると、小さな梵鐘が吊り下げられていた。境内には赤い毛氈の縁台が並べられていただけでなく、昆布茶のお接待がセルフサービスで用意されていた。

読経後、ゆっくり休憩したいと思ったが、これからの山登りの行程を考えると、そうも言っていない。時刻は 14 時前である。帰りの港までの道は足で歩くしかない。船に乗り遅れると大変なことになるとばかり考えていた。

14 番 清滝寺(きよたきじ)へ

一ノ谷庵を後にし、くねった集落道を通り抜け、寒霞溪へ続く県道を歩いた。目指す 14 番の清滝寺は、小豆島霊場の中では最高峰に位置すると聞いている。朝から歩き詰めであり、海拔ゼロメートルから徒歩での山登りである。そんなに標高が高くないが、気温が高くなってきていることもあり、体力の消耗が気になるところである。従って、どのくらいの時間で着くか自信がなかった。



県道に沿って歩いていると、18 番、20 番札所への近道の案内表示があった。目指す 14 番の清滝寺は、さらにその先に位置することから、その案内表示に従って山道を歩き始めた。木々に覆われた道なので、多少の涼しさを感じることはできたが、歩く道の勾配が急になってきたことから、歩く速度が落ちてきた。思わず道端の石に座り込んで休憩することになった。しかし、長い休憩は取れず、水を口にして直ぐに歩き始めた。山道を登りつめるとアスファルトの車道に出たが、そこは三叉路になっていて、左へ行けばロープウェイの駅、右に行けば寒霞溪である。良く見ると、もう一つの分岐路があった。それは 18 番石門洞への参道である。後で参拝する

予定なので、ここでは通り過ぎた。

右に折れて寒霞溪へ向かう。10 分くらいで 20 番佛ヶ滝の札所が左にあったが、この札所も後で参拝することにして、その先の清滝寺を目指す。観光バスに混じって乗用車がかなりのスピードを出して通り過ぎたり、向かってきたりする。良く見ると同じ車が何度も往復している。しばらくすると公道をサーキット代わりにしてドライブを楽しんでいるのが分かった。対向車にさえ気をつければ、両サイドから車や人が飛び出す心配がないので



格好の練習場になっているのだろう。

走り抜ける車に気を取られながらも、15時過ぎに清滝寺の山門に辿り着いた。意外と早く着くことができたが、県道から境内につながる石段を登る足が重く感じた。遠くの海を見ると、午前中に参拝した田ノ浦の岬が見えた。随分長い距離を歩いてきた実感を味わった。

背中のリュックを境内に置いて本堂へ歩み出ると、住職のお婆さんが居て、荷物を巾入れなさいと勧めてくれた。なんでも猿が出没して、人の持ち物を持ち去るそうである。また、開けた扉は必ず閉めるように注意された。リュックの中身は雨具ぐらいなのだが、猿に取られてはたまらない。また、ここの札所では、私の読経に合わせて住職が鐘と木魚で伴奏をしてくれた。

住職にお礼を言って本堂の石段を下ると、来る時に気がつかなかったが、寝姿の「金剛触菩薩」なる仏像があった。説明書きによると、諸人の悩みについてこの仏様を触ることによってご利益があるとのことである。珍しいものに出会ったものだ。ついあちらこちらを撫でて、悩みを聞いてもらった。

20番 佛ヶ滝（ほとけがだき）へ

清滝寺の後は下り坂なので、軽快に歩くことができた。暴走する車もこの時間はどこかへ行ったようだ。16時を少し過ぎた頃に佛ヶ滝に着き、鐘楼台に登り鐘を突いた。実はこの鐘の音が幸いした。後で住職に聞くと、この札所の閉門時間は夕方4時であり、洞門のシャッターを降ろしかかったところで鐘の音を聞いたそうである。参拝客が来たので、降ろすのを止めたそうである。私が本尊を安置している洞門へ行くと、半分閉まったシャッターがあり、住職から急いで参拝して欲しいと言われた。もう少しでシャッター越しに参拝を余儀なくされるところであったが、住職の親切に助けられた。ご利益があったようだ。



18番 石門洞（せきもんどう）へ

次の札所の入口の場所は分かっていた。県道の三叉路に面しているが、ここからの参道は長く険しく感じた。700mの距離表示があったが、勾配がきつい。もう登り坂はなく下りのみと置いていただけに、歩みが止まりかけた。それでもなんとか参道の行き止まりに辿り着くと、朱色の柱に支えられた本堂が目にとまった。本堂の右側の壁面には仁王像が彫り込まれているようにも見えたが、良く見ると後から安置したものようだ。鎖の手摺を手



繰り寄せるように石段を登ると、ここの本堂の入口にも、猿が出没するので扉を閉めるように注意書きが貼られていた。本堂の中には、参拝者が利用する灯明台や香炉が見当たらなかったのて読経のみ行って参拝を終えた。

19 番 木ノ下庵(きのしたあん)へ

石門洞を打ち終えて県道に戻ってきたら時刻は既に 17 時になっていた。四国 88 箇所の霊場のルールで言えば、納経時間は 7 時から 17 時までであり、もう時間外なので、これから参拝しても納経帳にご朱印をもらうことはできない時刻である。しかし、ここは小豆島の霊場である。寺院はともかく、堂庵はもともと住職が居ないし参拝に支障はないことから、この後帰りの草壁港に至るまで、途中の堂庵を時間の許す限り巡拝することにした。

19 番木ノ下庵へは 30 分余りで着くことができた。県道からの案内標識に従って歩いていくと、墓地に囲まれた中に、ポツンと建てられていた。境内には小さな梵鐘があり、軽く鳴らして参拝した。どこの札所でも同じであるが、参拝客と出会うことがなく、寂しい感じが漂う。



21 番 清見寺(せいけんじ)へ

木ノ下庵を打ち終えたが、まだ空は明るい。19 時のフェリーの出発時間まで 1 時間余りあるし、港まで 20~30 分くらいの距離なので駄目を承知で 21 番清見寺へ向かった。5 分余りで清見寺の鐘楼門の前に立つ。時間外かもしれないが、鐘を突いた。人の気配のない境内にその音が響き渡った。ロウソクと線香に火を点し、静かに読経を済ませ、その後、納経帳にご朱印を貰おうと納経所へ行こうとしたとき、一人の参拝客がやってきた。実はこの人とはこの後何度も会うことになった。納経所で何度もベルを鳴らしたが、住職の一家からは誰も出てきてもらえなかった。どこかへ外出しているのだろう。しばらく境内で待ってみたが、結局この日の押印は諦めた。

この間、納経所の前で先ほどの参拝客と世間話をする事になった。彼の話によると、年に何度か月単位で小豆島に仕事にやって来る。造船関係の仕事で広島からやってきているそうだ。私より 10 歳くらい年配に見えたが、これまでにご利益があったとかで、島での仕事の合間や自由な時間に参拝を繰り返しているとのことであった。



22 番 峯之山庵（みねのやまあん）へ

広島からの参拝客を見送った後も清見寺にしばらく残って住職の帰りを待ったが、結局諦めて、草壁港へ至る途中の堂庵を参拝することにした。どうせもう一度清見寺に来る必要があるので、その時にしても良いのだが、当てもなく住職の帰りを待つのは嫌なので、22 番の札所へ向かった。

細い路地裏を通過して札所への石段を登ると、そこからは草壁港を望むことができた。港はもう直ぐそこである。急ぐこともない。ゆっくり参拝を済ませて近くにある 23 番の札所へ向かおうとしたら、先ほどの広島の人に会った。彼は車で木ノ下庵へ行ってからここへ来たと言っていたが、車を止めるところに少し困ったようなことを言っていた。



23 番 本堂（ほんどう）へ

おまけのような参拝である。22 番の札所とは 5 分くらいの距離であるし、港への帰り道なので参拝することにした。本堂の境内はお世辞にもきれいとは言えなかった。雑草が生い茂り、手入れが余りされていない感じである。堂庵の入口の扉もガラスの代わりにビニールが張られていて、しかもところどころ破れていた。なにかみすぼらしく見えた。境内からは、先ほど訪れた峯之山庵が見えた。鐘楼を鳴らしてから参拝



するためにロウソクに火を点けようとしたら、灯明台が見当たらなかった。仕方ないので、手前の石段に無理やりロウソクを立てて、その火で線香に火を点け、その後読経をした。参拝を終えて、リュックを担いで港へ向かおうとしたら、再度広島の人がやって来た。彼曰く、「歩き遍路の方が早く参拝できる。」と。

帰路へ

草壁港は随分近かった。10 分とかからなかった気がする。港に着くと、丁度入港した直後で、フェリーから車や人が降りているところであった。19 時発の最終の船に乗り込むと少しウトウトしてしまった。久しぶりに長距離を歩いて、気持ちの良い疲れを感じたことや、船内で好物のビールを飲んで酔いが加わったことがその原因であろう。自宅での食事の妨げにならないよう、ビールのお代わりを押さえるのが辛かった。

（歩数：52,570 歩、船賃：570+570=1,140 円、バス：840 円、納経料：150 円×2 寺

+ 50 円×8 庵 = 700 円、残り札所数 : 47-14 = 33 箇所)

第 6 日目平成 18 年 6 月 11 日(日)

九州・四国・中国地方に入梅宣言がつい数日前にあったが、週末の休みは天候に恵まれた。昨日の土曜日は善通寺の境内を訪れて五重塔の内部の拝観をしてきた。善通寺創建 1200 年祭の行事のうちの一つで、普段は見せてくれるものではない。五重塔の中心を貫く心柱が礎石から 5~6cm も浮いているのに驚いた。懸垂工法というそうだが、構造計算などの概念のない時代における先人の知恵に感心した。吊り下げられた心柱が振り子の役割を果たすことにより、地震などによる揺れを和らげる構造になっている説明を受けた。

日曜日にも雨の心配がないことが分かり、小豆島遍路を続けたくなった。先週と同じ便の船とバスに乗り、草壁港のバス停で降りた。まず目指したのは清見寺である。一週間前に訪れた時に、住職一家が不在であったため、再度の参拝となった。今度はスムーズに納経を終えた。先週からの続きならば次の札所は 24 番安養寺であるが、通り道からそれほど離れていないことから、22 番峯之山庵と 23 番本堂をそれぞれ合掌だけでもと思い立ち寄ることにした。ところが、いずれの札所においても、改めて口ウソクと線香に火を点し、般若心経を唱えることになった。と言うのも、22 番では 4~5 人の墓参客がいたのと、23 番ではお遍路さんの団体がいたことから、この人達の手前、合掌して通り過ぎたのでは単なる通行人と見なされるのではないかと思ったのである。妙なプライドが出てしまった。「俺は歩き遍路をしているのだ」と。今日も帰りのフェリーの時間が気になるころであるが、まだ歩き始めである。時間の配分に注意すればなんとかなる。

23 番の札所の境内では、小豆島霊場協会の先達の方から声をかけられ、歩き遍路の苦労話などをした。

24 番 安養寺(あんようじ)へ

安養寺へは県道の歩道を歩いた。左は砂浜が広がり、もうすぐ海水浴で賑わうはずである。また、海面は鏡のように穏やかであった。ここの歩道はカラフルで明るい印象であった。10cm 足らずの正方形の色タイルで様々な模様が描かれており、鮮やかであるし見ていて面白く感じた。



案内標識に従って安養寺の境内に着いたのは 9 時半ごろであった。ここの住職は多分犬が好きなのだろう。ざあっと見ただけで境内のあちこちに 7~8 匹はいた。一斉に吠え立てられたが、小さな小型犬ばかりであったのと、私自身が犬好きなので危険に思うことはなかった。

納経の際、寺の家族の方から、今日は多くの寺の住職が不在であることを知らされた。とういのも、今日は善通寺 1200 年祭の行事で最後の休日に当たるからである。今週の 15 日の木曜日までがその期間であり、昨日も善通寺の境内では、うどん供養だとかで多くの僧侶がいたそうである。因みに、6 月 15 日は弘法大師（空海）の誕生日である。

25 番 誓願寺庵（せいがんじあん）へ

次の札所への道は直ぐに分かった。安養寺の鐘楼門を出た角のところに案内表示があったからである。細い道を歩いていくと、道は自然と登り坂になり木々の中を歩くようになった。10 分足らずで札所に着いたが、ここでは近くの夫婦らしい男女が境内や参道を清掃していた。「こんにちは」と挨拶をすると、境内の入口に蛇がいるから気をつけてといわれた。毒蛇かもしれないなどと脅されもした。良く見ると、頭が三角の形をしていて、体の模様も不気味に見えたが、敵もこちらを警戒して動かない。



そんなことがあったが、心を静めて堂庵に向かって読経し参拝を済ませた。掃き清められた境内での参拝は気持ち良かった。

27 番 櫻の庵（さくらのあん）へ

10 時前に 25 番の札所を後にした。歩く道は緩い下り坂になっていた。竹林の中を歩く山道で、水墨画に出てくるような雰囲気があった。反面、鳥の鳴き声がうるさいくらい響き渡っていた。奥深い山でもないのに、こんなところがあるとは思わなかった。札所への途中に「26 番阿弥陀寺奥の院 御水の大師」の看板の堂庵があった。合掌して通り過ぎようとしたら、「お遍路さんですか」と女性から呼びかけられた。その声に振り返ると、50 歳過ぎくらいの女性がいて、この井戸の水がおいしいから飲んでいけと勧められた。広島県から小豆島に移り住んで来て、既に主人は他界し、二人いる子供達はそれぞれ県外に住んでいて一人住まいだとか。さぞ寂しいのではと問いかけると、なんとこれが非常に明るい声の返事であった。楽しいそうである。強がりかもしれないが、ウォーキングにカラオケ、旅行と日々楽しんでいるようだ。この「御水の大師」の井戸水がおいしいので、毎日必要なだけペットボトルに汲みに来ているとのこと。その勧めに応じて飲んでみたが、冷たくて美味しかった。同年齢であることから共通する話題もあり、しばらくその後も立ち話をしたが、楽しい時間で



あった。

楽しい寄り道をしたが、辿り着いた札所は 26 番ではなく、27 番の櫻の庵であった。小さな堂庵であり建物から受ける印象はとても札所には見えず、簡素な集会場のようにも見えたが、札所の看板は新しかった。



26 番 阿弥陀寺（あみだじ）へ

巡拝の札所番号が前後した。27 番の前である 26 番の阿弥陀寺は、櫻の庵に背を向けて出ようとする右側にその寺の屋根が見えた。2~3 分の距離であった。鐘楼門があり一礼してから鐘を鳴らした。境内には本堂と大師堂とが建立されていて、どちらの建物の本尊に対しても同じようにそれぞれ参拝をしていると、5~6 人のグループ



の遍路がやってきて早口で本堂のみ参拝したかと思ったら、素早く立ち去っていった。上下とも白装束の格好なのでお遍路さんには違いないが、どこの札所でも同じようにしているのだろうか。

納経のご朱印は予想どおり住職が不在のため、自分で押すことになった。2 箇所だけなのだが押し間違えないように注意して押印した。

28 番 薬師堂（やくしどう）へ

26 番から次の 28 番までの間は、今日の遍路のうちで一番長い距離である。道は一本道で迷うことはないと思っていたが、目指す薬師堂が建替えて別の場所に新築されていたことから、移転先が良く分からなくなり、通りかかった地元の人に尋ねることになった。

阿弥陀寺を後にし、しばらくの間は海岸に沿って歩いた。砂浜を歩くと海開きの準備をしている風景も見ることができた。竹生（たこ）の集落から三都半島（みとはんとう）へ向かい、てっきりアスファルトの県道を歩くものと思っていたが、遍路道を示す赤い表示の立て札を見つけたのでその表示に従った。ショートカットの山道を抜けると未舗装の道を歩くようになった。車もすれ違えることができるだけの十分な幅があるが、1 台の車とも出会うことはなかった。12 時少し前には「長崎のしし垣」といわれるところを通りかかった。町の有形民俗文化財に指定されているもので、猪やシカなどから農作物を守るため、かつては島内で 120Km も築かれた垣の一部が残っ



ているところである。いわば小豆島版「万里の長城」である。物珍しいので少し立ち寄り見学した。

しし垣を見学した後は札所への道に戻り、山の中の産業廃棄物の処理場の横を通り県道に出る道を歩くようになった。地図ではこの辺りに札所があるはずなのだが、そこには大きな看板が設置されていて、薬師堂は移転した旨の表示がされていた。

直ぐには移転先の位置が理解できなかったもので、通りかかった車を呼び止めて尋ねたり、農作業をしている人に聞いたりして何とか新築の薬師堂に着くことができた。時刻は12時半になっており、参拝後この堂内で昼食を食べた。私が昼食を食べている間にも、地区の婦人たちが参拝に数人訪れてきた。その内の一人に、この札所が何時新築になったかを尋ねると、今年の3月3日との答えが返ってきた。

29番 風穴庵(かざあなあん)へ

短い食事時間を切り上げて、29番の札所へ向かった。今日の帰りの船は、池田港発18時のフェリーに乗りたいと考えていた。これを逃すと、土庄港までバスを利用してそこからのフェリーに乗るしかなく、バスの便も良くない。帰宅時間がさらに遅くなる。明日の仕事や夕食時間のことを考えると乗り遅れは避けたいと思った。港までの所要時間がまだ読めないことから、休憩は最小限に止めた。

歩き始めると海に浮かぶ小さな無人島が近づいてきた。花寿波島(はなすわじま)と名付けられた島で、県指定の自然記念物だそうだ。近くに説明板が設置されていて、それによると、海食作用により島が二分されたと推察され、典型的な海食地形が観察されるのが珍しいとのことである。島の名前も珍しいというか読みにくい。

さらに、読みにくい地名があった。「市神子」と表示されたバス停があり、農作業をしている老人から読み方を「いちみこ」と教えてもらった。小豆島には読みにくい地名が多く残っているものだ。

風穴庵へは迷うことなく14時前に着いた。境内の入口に遍路姿の若い女性が一人



座り込んでいたのに気がついた。直ぐに歩き遍路だと気がついた。リュックに断熱マットを背負った旅姿であったからだ。彼女に軽く挨拶をしてから本堂に向かい参拝を終えた。私が参拝を終えてもまだ彼女は座ったままで何か考え事をしているように見えた。結果、私の方が先に次の札所へ向かって歩き始めた。

30番 正法寺(しょうほうじ)へ

景色の良い道を歩き続けると、遍路道の案内板があり、歩く道は途中から車道から山道に変わった。その道が終わり、T字路になると左右どちらの方向へ行ったらよい

のか迷っていると、女性遍路が追いついてきた。彼女は道案内の地図を持っていて、右だといってくれたのでそこからは一緒に行動するようになった。私の持っている地図はアバウトなものであり、彼女のものは交差点の見取り図入りのものであった。どこで入手したか尋ねると、寺で売っていたそうである。

30 番正法寺は後から考えるとさっき迷ったT字路から見える位置にあった。

山門をくぐり境内に入ると、右手に鐘楼があり鳴らすことにしたが、彼女は興味がなかったみたいだ。この後の札所においても、鐘楼を鳴らすことはなかったし、境内で私が読経をしている間も手を合わせてはいるが、声を出すことはなかった。

ここの札所も住職は不在で、納経帳への押印はセルフサービスであった。慣れないこともあって、朱肉が手についてしまった。



31 番 誓願寺（せいがんじ）へ

次の札所への道は車道ばかりであった。気温が高くなり汗も出る。喉が当然渴く。道端の自動販売機でスポーツドリンクを購入しようとしたら、間違っただボタンを押して甘いジュースが出てきた。間違っただことをつい声を出したところ、近所にいた人が150円とそのジュースとを交換してくれた。なんと言ったら良いのだろうか。この方に深くお礼を言ったがこれは遍路のご利益だろうか。

誓願寺に着いたのは15時半頃であった。鐘楼門をくぐり境内に入ると正面が本堂かと思ったが、それは大師堂であった。本堂は大師堂の左側に回ったその奥の階段を登ったところにあった。庭のツツジが色鮮やかに目にとまったが、それよりも、この境内には国指定の天然記念物があるそうなので是非見学しようと思っていた。小豆島の観光パンフレットにも記載されているが、大蘇鉄の木である。境内の説明書きによると、多くの株から育っているように見えるが、1本の株からなり樹齢千年以上とされていた。樹勢の旺盛さと巨大さでは日本随一だそうだ。



本堂、大師堂とそれぞれ参拝し納経はスムーズに終わることができた。

34 番 保寿寺庵（ほじゅじあん）へ

誓願寺を後にして県道を歩くと、「32番奥の院 大師堂」の看板を見つけた。小豆島霊場協会の資料にはない札所である。どうも、小豆島霊場協会とそれぞれの寺院・堂庵との関係がうまくいっていないところもあるようだ。今朝、23番札所の本堂で

小豆島霊場協会の先達の方と話をした際、各寺院が奥の院と称して勝手に表示している状況が話題になったことを思い出した。この時点で池田港までの距離は 5km を切っていることから、よほどのことがない限り、18 時のフェリーの乗船に間に合うと確信したが、ここの奥の院を参拝することは見送った。

34 番保寿寺庵は県道に面した小高いところに建立されていた。坂を登り札所から見る海の景色が美しく見えた。見慣れたはずの瀬戸内海やそこに浮かぶ小さな島、さらには遠くの間々など、蘇鉄の葉越しに見る風景は、天候に恵まれたせいか新鮮に感じた。

同行している彼女のことだが、余りに若く見えるので、学生さんかと尋ねると、東京在住の高校生だとの返事が返ってきた。休学していて、四国 88 箇所の遍路も済ませた後、小豆島遍路に挑戦しているとのこと。驚くことに、野宿を続けているそうだ。リュックの中身は寝袋と着替えてそれほど重くなさそうだ。それにしても、女子高生が休学して野宿で遍路旅をしているとは驚きであった。彼女が言うには、毎日お風呂のお接待を島では受けることができているし、食事も特に困っていないそうである。



保寿寺庵の参拝を終えたのは 16 時を僅かに過ぎた頃だった。

32 番 愛染寺 (あいぜんじ) へ

次の 32 番愛染寺は随分近くて、10 分足らずで山門がある石段の下に着くことができた。山門をくぐっても更に短い石段が続いていた。境内に入ると、右側に大きな木があり、説明板には樹齢 900 年の真柏(シンパク)とあった。本堂は左の突き当たりであった。他の札所では余り見かけなかったが、願い事を書いた絵馬が左右の壁面に多く吊り下げられていた。



読経を終えて寺の人から話を聞くと、現在の建物の地面は地上げされて数メートル高くなっていて、そのため、境内の真柏の木がその分丈が短くなって見えるので、本当は大木であることを聞かされた。

33 番 長勝寺 (ちょうしょうじ) へ

愛染寺を後にして 33 番長勝寺へ向かった。小豆島の霊場の名前を見ると、同じ名前やら、似たような名前が多いのに気がつく。長勝寺は 33 番と 70 番が同じ。他にも 11 番と 55 番の「観音堂」、39 番と 64 番の「松風庵」がある。似たような名前では、25 番「誓願寺庵」と 31 番の「誓願寺」が、そのほか 3 番「観音寺」と 80 番の「子安観音

寺」も紛らわしい。

歩きながら今日はここの札所で打ち止めと決めたことから、前もって同行の女子高生に納経後は分かれることを伝えた。そのため札所に着いてからは別行動をとった。

納経所の手前の建物が本堂かと思って参拝すると、売店の女性から「ようお参りなさいました。奥にも本堂があるのでお参りください。」と言われた。その言葉に従い、売店をすり抜けて、石段を登ると広い庭があり、きれいに掃き清められた境内が広がっていた。静かに参拝した後、納経所を兼ねた売店に戻ると、女子高生は既に売店の片隅に腰掛け、手には箸を持ち、なにやら口を動かしていた。すると、売店の女性から「ご主人さんもよろしかったらトコロテンを召し上がってください。」なるお言葉があった。お接待なのだが、男女二人の歩き遍路が同時に参拝に来たので、てっきり夫婦連れと勘違いされてしまった。わたしはまだ良いが、女子高生は迷惑したはずだ。



ここの売店の女性は通いの従業員らしく、親切にも、帰りに次の札所の 40 番保安寺まで我々を車で送るとも行ってくれたが、私は歩き遍路を理由に丁重にお断りをした。

帰路へ

長勝寺を打ち終わると時刻は 17 時半近くになっていた。池田港に着くと船はまだ港に入港していないし、18 時の出港までまだ時間があることから、近くに酒屋がないか探し歩いた。意外や直ぐに発見することができた。再びこの港を使うときにも利用しようと思ったが、私の小豆島遍路の旅はもう終わりが近くなっていて、今の予定では帰路でこの港を使うことは計画していない。

心地よい疲れとともに我が家に着き、いつもどおりの夕食時間に間に合い、充実した一日を過ごすことができた。

(歩数：44,635 歩、船賃：570+570=1,140 円、バス：650 円、納経料：150 円×7 寺 + 50 円×11 庵 = 1,600 円、残り札所数：33-11 = 22 箇所)

第 7 日目平成 18 年 6 月 17 日(土)

天気予報では終日曇りであった。夕刻には崩れるかもしれないとの予報であったが、早く結願をしたいと考え、6 時 50 分発池田港行きの始発便に乗り込んだ。船は池田港のフェリーターミナルに 8 時前に着いた。土庄港を経由してバス便を利用して同じ時刻になることから、この便にしたが、出航時刻が遅い分朝自宅でゆっくりできた。

40 番 保安寺（ほうあんじ）へ

池田港から西へ歩くこと 15 分余りで保安寺の門前に着いた。緩い登り坂を登って鐘楼門をくぐる。大きく立派な松の木があり庭がきれいであった。境内には住職の家族の方や地域の人達が清掃作業をしていた。本堂は境内の右奥に建立されていた。ろうソクと線香に火を点し本尊の前で読経を唱える。慣れたはずの一連の行為であるが、読経のリズムがうまくいかなかった。と言うのも、本堂の中から人の気配がして、



木魚と鐘で調子をとってくれたが、私のテンポと微妙に合わなかったのである。それでも、最後に「ご苦労様でした」と声をかけられたが、なにやら気恥ずかしい気持ちがあった。自己流の読経なので、息継ぎの仕方が本職の方とは違うのだろう。

41 番 佛谷山（ぶつこくさん）へ

保安寺で納経の際、次の札所への道を尋ねると、「歩きですか？ 今は通れるかな。」なる返事が返ってきた。少し不安に思ったが、雑草や雑木が邪魔をして通りにくいかも知れないとの意味であった。鐘楼門の直ぐ前の細い道を通って山道に入った。山道を歩いていると、途中に矢印の入った小さな標識があったので、その指示に従おうと思ったら、どうも方向がおかしい。山を下る方向に向いているものもあった。よく見ると、電力会社のマークが入っていた。近くには送電線の鉄塔があったことから、保守点検用の案内標識であることに気がついた。数が多かっただけに実に紛らわしかった。

山道の区間は短く、歩く道はアスファルトの車道になった。道の前が開けて、前方の山の頂上付近を見ると、寺院のような建物が目に入って来た。おそらく目指す佛谷山の霊場であろう。

9 時少し前に参道の梵鐘を打ち鳴らした後、緩い坂を登って佛谷山の境内に入った。境内の中にも鐘楼があったのでここでも鳴らすことにした。本堂は境内の奥の洞窟の中にあった。洞窟の中で本尊に向かって読経をしていると、何かおかしいなと感じるものがあった。手元の資料によると、この本尊は薬師如来であるにもかかわらず、目の前に奉られているものは不動尊のような姿をしていたのである。よく気がついたものである。周りを見ると、洞窟の中はさらに奥があって、暗闇のなかに薬師如来の像が安置されていた。再度読経することになったのは言うまでもない。



洞窟から出ると外は明るく眩しく感じたが、空模様は少し怪しくなってきた。この札所の参道には幾つかの立て札が立てられており、興味深い内容があったので、幾つか書き止めた。

金がないから悩むのではなく、金に使われて悩むのである。

思いやりがあなたの人格をつくり魅力となる。

下を見れば我に優りしものはなし、笠とりて見よ、天の高さを。

耳を澄ませば風の音は仏の声、目を開けば山や緑も仏の姿。

他にもあったが、興味のある人は現地で自分の目で確かめると良いと思う。

42 番 西の瀧（にしのだき）へ

佛谷山からの次の札所への道も登り坂であった。車道から 1km 以上の坂道が続いたが、後でガイドブックを見ると、佛谷山から



直接 600m くらいの長さの山道があったみたいだ。近道になるのだが、全くその時は気がつかなかった。汗をかきながら札所の駐車場に着くと、孔雀が 1 羽いて私を迎えてくれた。人に慣れているのか、私が近づいても逃げようとしなかったのが驚きである。

境内への広い参道には石灯籠が並び、なにか厳粛な趣があった。境内の中は飛び石状に丸い踏み石があり、それを伝え歩いた。本堂かと思って参拝しようとする、住職が通りかかり、本堂は奥の建物であることを知らされた。その際、護摩堂への道も教えてくれた。私が本堂と勘違いした建物は大師堂であった。

本堂の参拝後、護摩堂へ続く岩場のトンネルを通過していると、加持水として洞窟内に水が湧いているところがあり、少しだけ飲んでみた。持ち帰り用の容器さえ売っていた。さらにトンネルを抜けるとそこには護摩堂があり、金色不動尊が奉られていた。

護摩堂の欄干越しに見る下界の景色はきれいであった。小豆島は地形の変化に富んだ島であり、同じ海や山を見ても、見る場所によって違った顔に見えるのがすばらしい。

護摩堂の後は、大師堂も参拝をしてから下山することにした。



35 番 林庵（はやしあん）へ

降らなきゃいいなと思っていたが、10 時過ぎにとうとう雨が降り出した。空はまだ明るいのでそんなに崩れる心配はないのだが、念のためカッパを着て札所を後にした。参道を下り元の車道に出ると次の札所への案内標識があったが、よく見ると、歩



き遍路用の小さな標識もあった。それに従い道路を横断する形で山道を下ったが、雨の中の歩行では両手のストック(トレッキングポール)が大変役立った。時々足が滑るが、その都度ストックに助けられながら、次の札所である林庵へは意外なことにあっけなく着いた。墓地に囲まれた古い堂庵であり、看板がなければ札所とは気づかなかったであろう。民家の玄関のような扉を開けて参拝を済ませた。

39 番 松風庵(まつかぜあん)へ

次の札所への道は普通の集落道であり、辺りには田んぼが広がりビニールハウスなどが点在していた。ここの札所も墓地に囲まれた中に建てられていたが、とても新しくきれいであった。通りかかった墓参りの人に聞くと、2~3年前に立て替えたそうである。よく見れば、堂庵の中に平成15年度に新築のために寄付をした人の名前が掲示されていた。軒に吊り下げられた梵鐘を鳴らしてから参拝したが、この時、雨は気にならないくらいになっていた。



38 番 光明寺(こうみょうじ)へ

光明寺への参拝の途中、近くの知人の家を訪問したことから、札所に着いたのが12時前になってしまった。今日の予定ではこれまでに残っている22箇所の札所を全て参拝する予定である。仮に1箇所10分の滞在時間とすると、220分、即ち4時間近くの時間を要することになり、歩く時間がその分少なくなることになる。読経の時間を削るわけにいかないの、休憩時間を短くし、参拝は手際良くし、歩くときはだらだらしないように気をつけた。



光明寺は民家やスーパーマーケットの立ち並ぶ中に位置していた。本堂の前に立つと、今まで何度も見たことのある祈願念珠が奉納されていた。また、住職が傍らで私の読経を聞いているのが見えた。これまでの私であれば、気後れして自然と声が小さくなったものだが、何度か同じ経験をするうちに、気にならなくなり、自分では堂々と声を出せたと思う。

36 番 釈迦堂（しゃかどう） 37 番 明王寺（みょうおうじ）へ

光明寺を打ち終えたあと向かった札所は 36 番の釈迦堂であったが、同じ境内に 37 番の明王寺があった。いや逆かもしれない。明王寺の境内に釈迦堂があったというべきだろう。境内の入口に明王寺の石柱が立てられていたからである。境内の鐘楼を打ち鳴らしてから参拝したが、釈迦堂の扉は閉まっていたので本尊の姿を見ることができなかった。



一方、明王寺は納経寺院であるので、本堂の中で参拝することができた。ここでも住職の方が私の読経に合わせて鐘をたたいてくれた。しかし、

私の読経のスピードが速いのか、息継ぎの場所が悪いのか、時々テンポを合わすのに気を使った。

また、読経をしながら本堂の天井を見上げると、格天井のひとつひとつの格子に般若心経の文字が描かれていたのが興味深かった。納経後、時刻は丁度 12 時を回ったところであったので、境内の片隅で昼食をとることにした。



43 番 浄土寺（じょうどじ） 45 番 地藏寺堂（じぞうじどう）へ

昼食を慌しく食べると直ぐに明王寺を出発した。これから山登りであるし、まだ残りの札所の数も多いことから、時間の浪費はしなくなかった。



県道に出て歩いていると再び雨が降り出した。午前中は、カップを着たり脱いだりでのしのげたが、午後のこの時間はダメであった。カバンの中の納経帳が濡れないよう気を使うことになった。約 1 時間歩いて中山（なかやま）地区にある 43 番浄土寺に着くことができたが、ここの境内でも別の札所が同居していた。石段を登ったところに山門があり、その左右に二つの札所の表札がかけられていた。



狭い境内であったが、山門を入れて左奥が浄土寺であり、その右隣が 45 番地藏寺堂であった。かなり古びた感じの寺院と堂庵である。それぞれ静かにお参りし納経帳にご朱印を貰おうとしたら、住職が留守なのかセルフサービスで押印

することになった。堂内の薄暗がりでの作業のため、ご朱印の種類や押印するページを間違えないように注意した。ここの寺院では、43番、44番及び45番の三箇所の札所を管理していた。

44番 湯舟山（ゆぶねさん）へ

浄土寺と地藏寺庵を後にして次に向かったのは44番湯舟山であるが、雨の中の山道を歩くことになった。滑りやすくて難儀した。しかも、靴の中まで雨水がしみ込んできた。防水仕様のトレッキングシューズで来ればよかったが、うっかり普段履きの運動靴を履いてきたのが悔やまれた。



30分くらいで湯舟山の入口に着いたが、ここからは有名な中山の千枚田を見下ろすことができた。小さな棚田が、階段状に並んでいた。見事な風景だが、先人の苦勞が偲ばれる。

境内に入り堂庵に向かって参拝したが、屋根に続く庇が短いため雨宿りができず、手に持つ経本が濡れそうになった。

また、境内の一番奥には名水と言われる霊水が湧き出していたが、すこし濁って見えた。

47番 梅尾山（とがのおさん）へ

湯舟山から次の47番梅尾山への道も山道がほとんどであった。途中、案内標識があればいいなと思う箇所もあったが、迷わずに辿り着いた。細い山道を歩いていくと、岩山の中の洞窟に札所が設けられていた。小豆島の霊場は洞窟が多いと感じる。午前中に参拝した41番佛谷山や42番西の瀧も洞窟であったし、1番洞雲山、2番碁石山、18番石門洞、20番佛ヶ滝、60番江洞窟、72番奥の院笠ヶ滝及び81番恵門ノ瀧の札所も洞窟の中に本尊が奉られていた。山岳霊場が多い印象である。この中で変わっているのは、60番の江洞窟であった。山岳ではなく海岸に面した岩肌を掘り下げた霊場となっていたことを思い出した。



48番 毘沙門堂（びしゃもんどう）へ

梅尾山を打ち終えたのは14時過ぎであった。次の48番毘沙門堂への道は地図で見ると湯船山からの周回道路になっていて、徒歩のみの一本道である。ここからは下りの山道で迷うことはない。滑り易い道であったが、両手のストッ



ク(トレッキングポール)がこの時も非常に役に立ち、10分足らずで毘沙門堂に着いた。ロウソクや線香を立てるところがなく、読経のみ済ませて48番の札所を打ち終えた。

46番 多聞寺(たもんじ)へ

毘沙門堂から多聞寺への道も山道が続いたが、距離はそれほどでもなかった。10分足らずで鐘楼門の前に着くことができた。鐘楼を鳴らして境内に入ると、直ぐ左手に地下への階段があり、誘われるように中に入ると、そこは不動明王を奉る祭壇が設けられていた。薄暗い戒壇巡りのような構造になっていて、地上に出るとそこは寺の本堂の前であった。振り返って見ると、地下の祭壇は、境内の庭の築山の下であった。本堂で読経を終えた後、納経帳にご朱印をいただこうとしたら、なんと寺の人が誰もおらず、家族の方の帰りを待つ羽目になった。運良く10分程度の待ちで済んだが、これ以上待つようなら見切りをつけて立ち去るつもりであった。



74番 円満寺(えんまんじ)へ

小豆島に以前通勤していたこともあり土地勘が残っている。ここまで来ると帰りの港までの距離と時間が読めるようになった。多聞寺を後にした時、近くに肥土山(ひとやま)の農村歌舞伎の舞台があることを思い出した。数百メートルの距離である。少し県道をバックすることになるが、折角の機会であるので立ち寄ることにした。運が良いのだろうか、それとも遍路のご利益なのだろうか、歌舞伎の舞台がある建物を外から見ていると、たまたま管理人がやってきて入口の鍵を開け始めた。「中を見ますか？」などと声をかけられ、喜んで舞台裏を見学させてもらった。

見学を終えた後は急いで74番円満寺へ向かった。案内標識に従い歩いていくと、道は緩い登り坂となった。雨は降り続けているのでカッパを着ているし、歩く速度はやや速めであったことから、汗をたくさんかくことになった。16時前に札所に着いて本堂を参拝した。ここでも住職の方が私の読経に合わせて鐘を鳴らして調子をとってくれた。



境内の庭は良く手入れがなされており、雨に洗われ木々の緑が鮮やかに見えた。

49番 東林庵(とうりんあん)へ

円満寺を後にした後は、幹線道路である県道を下った。やや歩幅を広げて急いで歩



くようにした。帰りの船の出発時間との競争になることが予想されてきたからだ。

次の札所は 49 番東林庵である。県道から 70m 離れたところにあった。僅かであるが、札所は石段を登ったところの山裾に建立されていた。小さな古い堂庵であったが、まだ新しい花が本堂の両脇に供えられていた。この辺りの地区の人が供えたものだろう。

50 番 遊苦庵（ゆうくあん）へ

札所間の距離が非常に短い。5 分くらいで次の札所である遊苦庵に着いた。県道から少し離れた旧道沿いに面していて、民家が近くに建っている。円満寺や先ほどの東林庵でもそうだったが、鐘楼や梵鐘がここでも設けられていないことに気がついた。恐らく昔はあったのだろうが、民家が近くにあることから、音の問題で今の状態になったのだろうと想像した。



52 番 旧八幡宮（きゅうはちまんぐう）、54 番 宝生院（ほうしょういん）、51 番 宝幢堂（ほうどうぼう）へ

集落道を歩き次に向かったのは、54 番の宝生院のつもりであったが、その手前に別の案内標識を見つけてそれに従った。着いた所は 52 番旧八幡宮であった。地図によると堂庵の直ぐ裏が老人ホームであった。辺りを見ると、お寺のような建物が見えたので、そこが目指していた宝生院であることが後で分かった。また同じ境内に 51 番の宝幢堂もあった。少し広い目で見ると、



51 番、52 番及び 54 番は同じ境内にあるように見える。とすると、53 番はどこだろうと考えた。53 番は本覚寺で、場所は 2km ほど離れている。調べてみると、小豆島遍路の初日に参拝済みであった。島の霊場遍路は札所の順番通りにはならないのがこれで分かる。

3 つの札所でそれぞれ静かに参拝を済ませた。宝生院の納経所でご朱印をいただく際に住職の

方に聞くと、このところ歩き遍路の人が増えていて、先週から幾人も見たし、今日に限っても私が3人目であるなどと言われた。逆の方向ならともかく、同じ方向に巡拝するので、歩き遍路は相手に追いつくか、追いつかれない限り互いにその存在が分からない。

ここの境内の真柏の木の巨大さは見事であった。



55 番 観音堂（かんのうどう）へ

3つの札所をほぼ同時に参拝を終えた。残りの札所は2箇所の札所のみ。納経帳の上では全て参拝したことになっているので、人に見せるのであればこれで終わり。しかし、私は歩いて全札所を巡り、足跡として一本の道を描くことを目的としている。仮に予定の船に乗り遅れることがあっても、この目的だけは達したい。

観音堂への道は山道と言っては言い過ぎだろうが細い民家の裏道であった。県道や民家が直ぐ近くに見えるのだが、山裾沿いから山手にかけて坂道を登るようになった。途中、草ぼうぼうのところもあった。歩き遍路の人が本当に多いならば、こんなに草が生え残っているのが不思議であるが、表示の立て札があったので遍路道に間違いはないのであろう。



55番の札所は「馬頭観音」とも呼ばれているようだ。と言うのも、札所へ至る途中で案内の表示が幾つかあったが、観音堂ではなく「馬頭観音」と表示されていたからである。坂を登ったところに突然観音堂は現れた。この時雨は既に上がっていた。時刻は17時半頃であり、丁寧に読経を終えると速やかに次の札所へ向かった。

56 番 行者堂（ぎょうじゃどう）へ

小豆島 88 箇所の霊場が本当は何箇所あるかはどうも定かではない。これまでも、小豆島霊場協会の資料と数が食い違っていたり、奥の院と称して札所があったりしていたからである。私にとっては、次の56番行者堂が最後の札所であると決めた。95番目の札所である。この最後の札所へ向かう山道の途中に「行者原薬師堂」とも読める堂庵があったが、合掌だけにして通り過ぎた。

56番の行者堂は山道に建つ小さな建物の角を曲がるとそこが境内であった。そこからは土庄東港が見下ろせた。県の合同庁舎も見えた。直ぐ近くである。



堂庵に向かって一礼し、梵鐘を鳴らす。これが最後の鐘である。ロウソクと線香に火を点し、心を込めて般若心経を読経した。声も大きく出して唱えることにした。誰も聞いている者は居ないし、仮に聞かれていても恥ずかしくない。自分では自信を持って参拝を終えた。

帰路へ

95 箇所目の札所の参拝を終えたが、よく考えるとこれで終わりではない。足跡をつないで一本の道にするためには、島の遍路を始めた土庄港まで歩いて行かなくては行けない。

行者堂から県道までの道は意外と急な坂道であった。距離はさほどでないが、登るとなると苦しいかも知れない。港への帰り道であり、その道沿いの「総本院」の前を通りかかったので、結願の報告をしようとしたが、18 時を既に大きく過ぎていたことから門が閉まったままであった。事務所の電気も消えていた。門の外から合掌して「南無大師遍照金剛」と唱えて通り過ぎた。

目の前に、土庄港が見えてくると、いよいよ島遍路のゴールである。少し気持ちが高ぶったのだろう。なにかマラソンの最終ランナーのような錯覚をした。誰も待ち構えていないゴールに最後に飛び込む感じである。無いはずのゴールテープを心の中で切った。一日の黄昏時と遍路の最後の時とが重なった。誰か一人でも拍手をしてくれたらいいなと思った。時計を見ると 18 時 30 分。丁度高松行きの最終便のフェリーが待っていてくれた。10 分後船は動き出した。まるで計ったような遍路旅であった。

(歩数：44,906 歩、船賃：570+570=1,140 円、納経料：150 円×7 寺 + 50 円×11 庵 = 1,600 円、残り札所数：22-22 = 0 箇所)

おわりに

「お四国病」という言葉があるようだ。昔の人は死ぬまでに一度は四国 88 箇所の遍路をしてみたいと願っても、四国までの交通手段が限られていたことや、経済的に大きな負担であったことなど、様々な理由でその願いをかなえられる人は少なかったと考えられる。交通機関が発達した現代においては、誰でも比較的簡単に四国遍路ができるようになった。しかも、生涯に一度だけの遍路ではなく、何度も遍路を繰り返すことができるし、実際にそういった人がいることを知った。一度四国遍路を終えた人も、しばらくするとまた繰り返して遍路の旅に出たくなる。一冊の納経帳が朱肉で真っ赤になるほど遍路を繰り返す四国遍路の魅力とは一体どこにあるのだろう。

このように繰り返し四国を遍路したくなる人を病気に例えて、「お四国病」にかかっていると表現されるそうだが、私は今その病気になりかかっている。今ならその病気を断ち切ることができる。否、喜んでその病気なることもできる。今は病気発症の潜伏期にあるような気がする。

昨年春、公共交通機関を利用して歩き遍路を試みた。最初は、単に運動不足の解消が目的であったが、途中からは遍路そのものが目的になったようだ。高野山奥の院まで参拝に出かけたのがその気持ちの現れである。再び春になり遍路の季節がやって来て、今度は小豆島に偏在している寺院、堂庵を巡り歩きたくなった。島の港までや最寄りのバス停まではやむを得ないが、目的地に着いてからは、親から貰った二本の足のみで札所間を歩く。そして歩いた跡をつなぐことにより一本の道を描く。このコンセプトだけは曲げないと心に決めて、延べ7日間で95箇所ある札所の巡拝を終えた。すべてが日帰り旅であったが、予定より一日早かった。

「プチお四国病」にかかっている状態と診断されそうだが、7日間の「闘病記録」を記念に記した。

なお、四国 88 箇所に関する遍路の本は多数あるが、小豆島遍路については非常に少ない。私が参考にさせてもらったのは、富永航平著「小豆島遍路と旅」(2003年1月 朱鷺書房刊)という書物で、札所の歴史や地図、札所間の距離等が収められていて大変役に立った。同じような遍路旅を志す人に勧めたい。

7日間の病気の旅を数字でまとめると次のようになった。

回数	日付	歩数 (歩)	交通費 (円)	参拝 札所数	備考
1	4/16	42,298	1,140	17	(納経にかかった経費)
2	4/22	40,602	2,300	12	寺院 30 × 150 円 = 4,500 円
3	5/14	39,138	2,970	7	堂庵 65 × 50 円 = 3,250 円
4	5/20	40,000	2,820	12	納経帳 1,000 円
5	6/4	52,570	1,980	14	合計 8,750 円
6	6/11	44,635	1,790	11	飲食費は除く。
7	6/17	44,906	1,140	22	
合計		304,149	14,140	95	

山登りの区間も含めて、平均歩幅を 50cm とすると、304,149 歩 × 0.5m/歩 = 152,074m 即ち 152Km の結果を得ることができた。

小豆島霊場一覧

番号	霊場名	番号	霊場名	番号	霊場名	番号	霊場名
1	洞雲山	24	安養寺	48	毘沙門堂	71	滝ノ宮堂
2	碁石山	25	誓願寺庵	49	東林庵	72	滝湖寺
3	観音寺	26	阿弥陀寺	50	遊苦庵	奥 72	笠ヶ滝
奥 3	隼山	27	櫻ノ庵	51	宝幢坊	73	救世堂
4	古江庵	28	薬師堂	52	旧八幡宮	74	円満寺
5	堀越庵	29	風穴庵	53	本覚寺	75	大聖寺
6	田ノ浦庵	30	正法寺	54	宝生院	76	金剛寺
7	向庵	31	誓願寺	55	観音堂	奥 76	三暎庵
8	常光寺	32	愛染寺	56	行者堂	◎番外	藤原寺
9	庚申堂	33	長勝寺	57	浄源坊	77	歓喜寺
10	西照庵	34	保寿寺庵	58	西光寺	78	雲故庵
11	観音堂	35	林庵	奥 58	誓願の塔	79	薬師庵
12	岡之坊	36	釈迦堂	59	甘露庵	80	観音寺
13	栄光寺	37	明王寺	60	江洞窟	奥 80	山の観音
14	清滝山	38	光明寺	61	浄土庵	81	恵門ノ瀧
15	大師堂	39	松風庵	62	大乘殿	82	吉田庵
16	極楽寺	40	保安寺	63	蓮華庵	83	福田庵
17	一ノ谷庵	41	佛谷山	64	松風庵	84	雲海寺
18	石門洞	42	西の瀧	65	光明庵	85	本地堂
19	木ノ下庵	43	浄土寺	66	等空庵	86	當浜庵
20	佛ヶ滝	44	湯舟山	67	瑞雲堂	87	海庭案
21	清見寺	45	地藏寺堂	68	松林寺	88	楠霊庵
22	峯之山庵	46	多聞寺	69	瑠璃堂	◎番外	総本院
23	本堂	47	柁尾山	70	長勝寺		

奥 No は奥の院、 ◎ は番外霊場を示す。

(別添「遍路の軌跡」で示す地図においても同じ)

